



東方三界黃龍伝 「小龍編・第三部」
文・絵 小龍

目次

8	7	6	5	4	3	2	1
帝都 2	帝都 1	出雲 3	出雲 2	出雲 1	小龍の主張	神谷邸の一夜	龍王山にて
115	96	86	64	54	36	24	5
	あとがき	14	13	12	11	10	9
		青と黄	サードヒアリング	氷解	回収作戦	冥府の王	帝都3
		181	178	169	158	146	129
	187						

主な登場人物

- シャロン
沙龍 (甲斐馨) かおる ……主人公。黄龍の保持者。
- へきかげんくん
碧霞元君 ……天空山管理者。輪廻転生のシステムを終わらせることを目論む。
- けいしゅん
景春 ……東方軍大将。天界一という剣技を持つ。
- えんげつ
偃月 ……沙龍の異母弟。
- ごうじゅん
敖閏 ……西海龍王。ダンデーな中年。
- シャオロン
小龍 ……沙龍のペットの幼龍。
- くらい
九雷 ……天界軍元帥。沙龍の婚約者。
- とうしろう
神谷藤四郎 ……沙龍の母方の祖父。倉敷市在住。
- 神谷百合子 ……故人。沙龍の実母。沙龍を産んですぐ亡くなった。
- 甲斐弥太郎 ……故人。沙龍と偃月の実父だが、親子間の面識はない。
- 泰山府君 ……冥府の創始者にして管理者。娘の碧霞元君に命を狙われている。

1 龍王山にて

龍を喚ぶ『呪』^{しゅ}というものがある。

古代から続く龍の血に直接呼びかける『祝詞』^{のりと}だ。

それは、龍を制した盤古を祖とする神々が、龍を使役するためのものに他ならなかったが、いつしかそれが人界に伝わり、特殊な力と血を持つ人間だけが、特殊な場所で、龍を喚ぶことができるようになった。

一九七九年の倉敷市で、甲斐弥太郎が行ったのはまさにそれである。そして、このとき、古式ゆかしき祝詞に応えたのが西海龍王だった。

水晶宮での宴の帰路、東海を遊泳していたところ、東極山よりもさらに東の果てで、その祝詞を唱える者が居たのだ。興味津々、これは行ってみなければなるまい——、と、敖閏は境界を越えて極東の領海に入った。

そこでは八大竜王が「どうする？」などと言いつけている。明らかに彼らは躊躇していた。なぜなら、その祝詞は始祖たちの作成した、限りなくオリジナルに

近いものだったからだ。もしや始祖本人なのではないか？ そんな疑念すらあった。

敖閏は「僕が行こう」と、前へ出た。白い龍の姿である。

八大竜王たちは敖閏の姿に畏れを抱いてこの場を——内心喜んで——譲る形になった。

「お初にお目にかかります、龍王様」

甲斐弥太郎はいきなり現れた真っ白な龍にそう言っ、拱手してみせた。

「ずいぶん古い祝詞を知ってるね。君は誰？ 誰にその祝詞を教わったのかな？」

「私は黄龍の因子を預かる者。甲斐弥太郎と申します。祝詞は母から教わりました。この血と力があるべき場所にお返ししたく、真なる龍穴を探しております」

「これは驚いた。黄龍だって？ いつの間にそういうことになったのかな」

「我が身に受けたこの血と力は、もともと唐土の武人が運んできたものだった、と聞いております。『彼』は大陸の為政者より追われていたようです」

最初にその武人と関係を持った一族は、大和朝廷の官吏だったようだが、実は

何者かに根絶やしにされている。大陸からの干渉があつたのは明らかだろう。しかし、一人二人、内陸に逃げ込んだ者が居た。

その後、甲斐家が受け継ぐことになった経緯は分からないが、既に十一世紀頃（平安時代末期）には記録があると弥太郎は言っている。

「我々は姻戚である武田家から非公式に庇護を受け、表には決して名前を出さない族として、数百年、この血を守ってきました。甲斐の名は、一族の最後の生き残りである私の母が斎藤家に嫁いだことで消えました」

幕末のころに生まれ、年を取らぬ姿で二百年彷徨っていた若者が、なにかを決心して龍王を喚び、その血を真に開花できる者に託そうというのだ。

西海龍王はこの偶然に震えた。

緑麗が保持していた黄龍が、いま、この若者の身の内にある。

「そうか……、僕がまどろんでいる間にもう三千年という時間が過ぎたんだね」
緑麗に連なる者なら、協力は惜しむまい。この若者を助ければ、彼女はやがて還ってくるだろう。

「君の言う龍穴は、おそらく地上にひとつ残された、黄龍の休息場のことだろ

う。地図上で示してもたどりつけないよ。特殊な結界が張られている。僕の護符が要るね」

そう言って、紙にさらさらと書きつけたものを渡した。

「ありがとうございます」

「しかし、一人で行くの？ 大変だよ？」

そのとき、様子を伺っていた八大竜王のひとりが西海龍王に進言した。

「私の配下に、かつて罪を犯し、その罪をつぐなうために人に転生した者がおります。もとは地霊なのですが、その者に役に立ってもらいましょう」

それが、神谷百合子だった。

人としての役目を終えた神谷百合子はいまは地霊に戻っているのだが、日本に居ながら西海龍王個人に仕えるという、少し特殊な立ち位置にある。

直接の上司だった八大竜王に「以降は敖閏様にお仕えせよ」と言われたのだ。

「弥太郎さんは色々と苦悩なさっていて、実はあのあと、大陸に渡って、村に落

ち着いてからも、すぐ子供を作ろうとはしなかったんです」

「そうだったの？」

龍王山山頂で、スーツ姿の敖閏は石碑に座って気軽に話している。

話す相手はかつて神谷百合子と呼ばれていた地霊である。敖閏は「リリちゃん」と呼んでいた。巫女のような恰好をしているが、サイズはとても小さい。身長は二十センチほどしかなかった。

「彼本人の無性愛者という傾向もあったんですが、それよりも、私に対する心配のほうが強くて、人間と交わったら地霊に戻れなくなるのでは、と気にしておられました」

「あゝ、なるほどね。真面目だね、弥太郎君は」

「はい。それで、最終的には香林さんが体外受精をすすめてくれたんです」

沙龍が試験管ベビーとして生まれた経緯が、そこにあつた。はからずも緑麗と同じように培養液の中で育った赤ん坊が、黄龍をその身に宿すことになったわけだ。

しかし、実際、本当に処女性が重要だったのかというと、そんなことはない。

それは日本的な倫理観に基づく甲斐弥太郎の誤解でしかなかった。敖閏は小一時間くらいの雑談を楽しんでから、

「それで、弥太郎君はいまどこに？」

やっと本題に入った。

敖閏はそれが聞きたくてはるばる岡山までやって来たのだ。

「知りません。ここには現れていません」

地霊にはほとんど感情の起伏はないので、教科書のように答える。

「そうか。おかしいね。冥府にもいないし、転生もしていないから、てつきりここに遊びに来てるのかと思っただけ……。リリちゃん、ほかに心当たりはある？」

「故郷ではないでしょうか？」

「うーん、あっち方面は気配がまったくくないんだよね。彼は若いころから各地をフラフラしてたみたいだから、あんまり思い入れのある土地とかはないんじゃないかなって気がするんだけど……。どう思う？」

「そうですね。京都にはお世話になった人がいたみたいですが、懐かしむという

感じではありませんでした」

「そう……」

標高二百メートルほどの小さな山で、山頂に『龍王宮』があるとはいえ、それほど人の出入りは多くない。たまに地元の間人が散歩がてらに御参りにきたりする。

いまでも、トレッキング姿の中年の女性が石碑に手を合わせていったが、彼女には敖閏も地霊も見えていないようだ。

「うーん、どうしようかな。アテもなく探しに行くのもなあ……」

岡山に来る前に東京も京都も観光してきたのである。いまから別の都市に観光がてら行って、人探しをする気にはなれなかった。

と、そのとき、

「おや、お客さんだ」

敖閏はのんびり言ったが、地霊はただならぬ気配を感じ取って身構えていた。

「……!?!」

複数の気配である。しかも、そのうちの一人は龍王よりも力が上だ、と直感的

に分かった。自分の出る幕ではない。

「だから、なんで見えてるのに迷うんだ」

「だって、本来の入口と地図上の表記がズレてるよ？　なんか法則のよく分からない結界がかかってるもん」

「あ、ユエのそれ、美味しそう」

「フッフ、白桃味キビダンゴやで」

「いや、そのへんな関西弁やめて」

「あ、それ、私も欲しい」

「フッフ、あげてもいいが、鬼退治やで」

「おい、おまえら、遠足じゃないんだから」

「ちよっと喉かわいたな。哥々、お茶もってるか？」

見れば男女二人ずつの四名様で、とにかく騒がしい。ワチャワチャと好き勝手にやっている。

敖閏はなんとなく予想していたのか大して驚かず、

「やっほー、御一行様」

ひらひらと手を振ってみせた。

「あれ？ 敖閨様？」

キビダンゴを頬張っていた碧霞元君がまっさきに反応した。

いつもとは違う、日本の女子高生のような恰好をしている。実は、沙龍が昔着ていた制服なのだが、まったく違和感がなかった。

「西海龍王殿？ なぜここに——」

引率者のような景春はオフのサラリーマンといった感じだ。黒のタートルにGパンである。どこかのCEOのようだと敖閨は思ったが、これも実は借り物である。東京で沙龍が松木ゴローに借りてきたのだ。

偃月は、勝手知ったる東新宿の家で木佐の服をちやつかり借りてきた。沙龍は自分の部屋から自分の服を持ってきただけである。

羽田に降り立った一行はひとまず東京の東新宿の木佐邸に向かった。家主には事前に了承を取ったが、

「もう人手に渡ってるんじゃないか？」

と木佐は言っていた。

確かに、あれからもう五年は経っている。街並みさえ変わってしまう年月だが、木佐邸は当時のままそこにあった。家の中も変わってない。

仙界に行くことが決まったとき、木佐も沙龍も家の中を整理していかなかった。それも当然の話で、あのときは戻ってくる前提だったからだ。猫三匹も知り合いに預けていった。

しかし、仙界を越えて行きついた天界で沙龍がとんでもない選択をしたおかげで、ふたりはそのまま天界住民となったのである。

結局、松木ゴローだけが日本に戻って来たわけだが、その松木が、住む者の居なくなった木佐邸を管理し、猫も引き取ってくれたらしい。

そうして、松木との再会もそこそこに、東京観光したいと言い出した碧霞元君には「用事が終わった後で！」と言い含め、新幹線で岡山までやってきたのである。仕事で来ている景春以外、遠足気分なのは仕方がない。

「西海龍王、失踪したってのは、まさかここに来るため？」

「おー、あの御人が西海龍王？ 噂通りのイケメンだなー」

李姉弟も口々にそんなことを言っている。

「ありがとう」

と、敖閏はニコニコしながら偃月に言つて、

「まあ、お互い聞きたいこともあるだろうけど、ちよつとその前に、母子の対面をさせてあげていいかな？」

「……？」

沙龍はまだ実感がない。

この精霊のような無機質な存在が自分の母親だといわれても、抱き合つて喜ぶこともできないし、第一、そういう雰囲気でもない。

「えつと……」

敖閏が気をまわして「ふたりきりにさせてあげようね」と言うので、石碑に座つてふたりだけで話している。

「実は私のほうは初対面ではありません」

地霊が我が子を見上げて言った。

「……？ そりゃ、産んだときに会ってるよね？」

「いえ、そうではなく。一度、あなたが岡山に来たときに、この龍王山まで導いたのが私です。鈴木千春さんの力を借りて」

「え〜と？ あ、……ああ！ あのときの！」

懐かしい名前を聞いて、沙龍は急に思い出した。

まだ東新宿探偵社という会社の社員だった頃、同僚の千春とふたりで岡山に来て、地霊の導きにより甲斐弥太郎の軌跡を知ったのだ。

「そっか。あれがお母さんだったのか。なるほど。だいたい分かったよ」

あのとき、神谷家の所縁ゆかりの地霊だと言っていたことや、龍王がいなければ姿を現すことはできないと言っていたこと、それらが全ていま証明されている。

「そういえば、お母さんは、なにか因業があるって言ってたよね。そのために甲斐弥太郎の望みを叶えないといけなとか何とか。それはなんだったの？」

「はい。私は古くからこの山を守っていましたが、あるとき、病気の旅人に間違った処方をしてしまったことがあります。そのせいで彼は命を落としました。

その罪をつぐなうために、人に転生して、誰かの命をつなげるようなことをす

るように、と八大竜王様に言われました」

「間違った処方……？ お母さんは病気を治す人、いや、地霊なの？」

「はい。微弱ながら我々にはいろんなものを癒す力があります。それは大地の持つ力です。しかし、病の本質を理解しないまま力を使うと、死期を早めてしまうこともあります」

「……大地の、力」

黄龍の力も同じだ、と沙龍は思った。リセットする力。大地の癒しの力で星すらもリセットする。

「それで、この山の所有者である神谷家の人間に転生し、医者になろうとしたのですが、神谷の父には反対されました」

「あー、じーちゃんがねー」

「その頃、岡山を訪れた甲斐弥太郎さんに出会い、この人物についていくように、西の龍王様に言われました。彼の望みをかなえることがつぐないになるから、と」

その後のことはだいたい沙龍も知っている。

甲斐弥太郎と神谷百合子は大陸に渡り、あの名もなき村を目指した。

目的は、龍穴のそばで黄龍の保持者を作ること――。

「その後、村のみなさんが亡くなったこと、碧媛だけは助かったことは知っています。碧媛、元気ですか？」

「うん、元気だよ」

「そして、あの子が偃月ですね？ 弥太郎さんのもう一人の子供」

地霊は向こうの木陰でお菓子を広げている偃月を見て言った。お菓子は駅前で購入いこんでいたものだ。

碧霞元君がその品評会をのぞき込んでいる。

「うん」

「弥太郎さんにそっくりです」

「そうなんだ。でも、性格はだいぶ違うんじゃないかなー。お父さんはすごい真面目な人だったんでしょ？」

「そうですね。真面目で、いつも悩んでいて、でも、とても優しい人でした」

「……」

亡き母の口から、亡き父の話を書くというのも妙な体験だったが、なによりも妙なのは、この地霊の無機質な受け答えである。

「えーと、地霊さん、いまの名前は？」

「名前は特にありません。西の龍王様は『リリちゃん』と呼んでいます。それは『百合子』の英語名だそうです。名前がなければ困るというなら、百合でもリリーでもなんでもいいです」

この淡々とした感じはなんとも言い難い。

「ただ、私は神谷百合子の記憶は持っていますが、既に神谷百合子とは別の存在です」

「うん、そんな感じはするよ」

しかし、沙龍は、ふとこの母親に恋愛相談を試してみたくなった。こんな機会はもうないだろう、と思ったし、なまじ近い人間に相談するよりはいいと思えたからだ。

「ねえ、お母さんは弥太郎さんのことどう思ってたの？」

「私は弥太郎さんのことは好きでした。夫として愛していたのかといえれば違いの

ですが」

「そうなんだ」

「弥太郎さんの方も、私を妻として愛していたわけではないと思います。私たちは仲の良い友達のようにでした」

「じゃあ、男の人を男として愛したことはない？」

「ないと思います。神谷百合子のときにそれを経験したことはないですし、いまの私は敬愛というものしか知りません」

「そっか……。じゃあ、一般論とか想像で構わないんだけど、恋人のことが分からなくなったときって、どうすればいいの？ 問い詰めたくはないんだ。だって、それはもう信じてないってことじゃない？」

「それはいまあなたが抱えているトラブルかなにかでしょうか？」

「うん」

「そうですね。『信じている』と『信じたい』は違うと思います。あなたはいま恋人のことを信じていることができていないのでしよう。でも信じたいと思っっている。ならば、冷静に事実関係を明らかにすることが先決ではないでしょうか」

「……」

すごい正論だ、と思った。弁護士に相談している気分である。

その母娘の奇妙な逢瀬のあいだ、敖閏は景春と話していた。

自分が失踪したあとの天界でなにが起こったのかを聞いていたのだ。

「えっ、結局、盤古真人は復活しちゃったの!？」

「はい。ただ、敖丁がいうには『至宝のひとつがニセモノだったのでかろうじて完全復活には至らず』と」

言下に「あなたの渡した至宝がニセモノだったのでは？」と分かるように言うてみた。

「……」

敖閏はしばらくはなにかを考えているようだった。この態度からは是とも非とも判断はできない。

「それで、いまの状況はどうなってるの？」

「魁星隊長がなんとか元帥の体の中に盤古の意識を封じ込めていますが、いつまでもつかは分かりません。なので、早急に対抗策として、小龍を呼び出す必要があります」

「なるほど。君たちはそのためにここに来たのか」

敖閏はあの小さな龍が『混沌』そのものであることを知っている。少し前までは単なる推測であったが、九雷はその推測は間違っていない、と言っていた。

そして、『霸王』を飲んでみて、確かに九雷の言う通りであったことを知ったのだ。

「龍を喚ぶ場所としてここを選んだのは間違っていないよ。だけど、一度負けた相手と戦うために出てきてくれるかどうか……」

敖閏の言い方からして、小龍を喚び出すのは難しいのだろうと分かるが、景春はかまわなかった。

自分はただ結果を持ち帰るだけである。

龍のことは龍たちがやればいい。そう思っているのだ。

一方、碧霞元君は偃月の駄菓子蘊蓄うんちくを聞きながら、神谷百合子の小さな姿を眺

めていた。

二十数年前にお忍びで湖北の村に降り立ち、就寝中の神谷百合子の肚内に術を施したことが思い出される。

あ那时候、夫婦別室だったのは幸いだった。もし甲斐弥太郎が隣に居たら、気付かれていただろう。

生まれてくる甲斐馨に自分の四行を分けた——と碧霞元君は木佐に語っていたが、それは口で言うほど簡単なことではない。

人間の感覚で言えば、体内の血をゴっさり輸血するようなものである。十年くらいはまともに動けないほど疲労した。

(……)

果たして、あれをやった甲斐はあるのかないのか。

それはもうすぐ分かることだ。

2 神谷邸の一夜

神谷藤四郎は突然の孫の訪問にも動ぜず、その孫が連れてきた一行を快く歓迎してくれた。

こういった事態には慣れているのだろう。

「ごめーん、じーちゃん。この広い家ならなんとかなると思ったんだよ」

沙龍の背後には、偃月、碧霞元君、景春、さらに一人増えて敖閏まで居る。

藤四郎は、

「まったく、このバカ孫が！ 来るなら連絡せんかい！」

沙龍には軽く怒ったが、

「お客人は歓迎いたす。どうぞごゆるりとしていってください」

と、特に敖閏に対して、深く一礼をした。

単にこの一行の中では一番年上だから、という理由ではないだろう。

夕飯が終わった後に沙龍を呼びつけて、

「あの御仁はどなたか？ まさかお前、とんでもない方を連れてきたのではあるまいな」

と聞いていた。

「うゝん……いやゝ」

などと沙龍はごまかしたが、普通の人間でないことはバレている気がする。そして、偃月に対しては、沙龍が紹介する前に、

「甲斐……!?!」

と思わず呼びかけていた。弥太郎を彷彿させたのだろう。

「前にじーちゃん^{イエイエ}が、自分が生きてるうちにもう一人の孫を連れてこいって言うてたから、連れてきたよ」

「ああ、そうじゃったな。偃月^{イエイエ}というのか。よく来た。ゆっくりしていけ」
「爺々、ハジメマシテゝ」

ニパツと笑う偃月もまた、風林という祖父を思い出したのだろう。偃月も沙龍もおじいちゃん子だったのである。

人界に長らく潜伏していた景春や、たまにこっそり遊びにきている敖閏は人間の暮らしというものを知っているが、碧霞元君は見るもの触るもの全てが珍しいので、ここでも浮いていた。

箸は使えるが、見たこともない料理が次々に出てくるので夕飯の席ではいちいち隣の沙龍に聞いていた。

これはなんていう料理？ 素材はなに？ どういう味？ などなど――。

「碧霞チャン、日本食食べたことないの？」

敖閏が聞いた。

「ホークス君がたまに作ってくれるんだけど、こんな本格的なのは初めて」

「お刺身美味しいよ、これとか」

と、沙龍は遠くの大皿から碧霞元君の小皿に取ってやった。

そのふたりの様子は中高生くらいしにか見えない。学校の友達のようにだ。

「あ、そうだ。じーちゃん、ユエんところはもうすぐ子供が生まれるんだよ。いつか連れてくるね」

沙龍が急にそんなことを言い出した。

「なんじゃと？ この童顔でもう嫁がいるのか」

「アハハ、といつても、もうイイ年ですよ」

偃月もその程度の日本語は分かる。

「ム？ 馨、お前ももう結婚しているのか？」

「私はまだ独身だってば……」

言ってみて、九雷のことを思い出してしまった。

結婚という文字がふたりの間に出たことはないのだが、たとえば沙龍が結婚したいといえば九雷はすぐに書類を取り寄せ、完璧に仕上げた上で役所に提出するだろう。沙龍がやりたいといえば式もするし、披露宴もするはずだ。

しかし、いま、九雷が求婚した場合、沙龍は『是』というのかどうか、本人でさえもよく分からなかった。

前世の自分を、恋人になりすまして殺したという、衝撃的な一事がずっと引つかかっている。

（やっぱり、お母さんの言う通り、事実関係をはっきりさせないとだめだな…

…)

しかし、どうやって？ 碧霞元君に、ルーシア・フォン・クリストフの調書でも見せてもらうか？

客室は一人一部屋用意してもらったが、明日の『本番』を前にミーティングをすべく、沙龍の部屋に集まった。

本当は、今日にでも龍王山で召喚儀式を行うつもりだったのだが、敖閏が居たことで予定を変更した。

まず、人目を避けるために夜中に行うこと、さらに念のために碧霞元君には関係者以外誰も入ってこれないように結界を張ってもらうこと、喚び出しの儀式は基本的には沙龍がひとりで行うこと——、などが確認された。

「私、黄龍の召喚用の祝詞以外、知らないんだけど……」

沙龍が言うと、

「僕が教えてあげるよ」

浴衣を着た敖閏が座卓でなにやら作業を始めた。

打合せすることはそれほど多くないので、そのふたりを残して解散となり、偃月は藤四郎に呼ばれて将棋の相手をする事になった。

「基本的に言葉はどこの国のものでもいいんだよ。意味さえ同じなら」
敖閏は言った。

「じゃあ、郷に入ればで、日本語にします。ここは日本だから」

「そう？　じゃあ、僕は中国語で書くから、緑麗チャンが訳してね」

「『龍神様、御姿を顕してください』——基本はこれでいいの。あとは心を込めて、お願いするだけ」

「結構いい加減なんですネ」

一方、碧霞元君はすることもなく、なにをしていいかも分からないので、ボーっとしていたところ、景春に庭に連れ出された。

気を使っているのか、それとも単に警戒しているのか、といえは両方だろう。

景春は、半分は碧霞元君の監視目的でそばに居るのだから。

「なにがあるの？」

作務衣を着た碧霞元君は縁側に座った。

「蛍、見たことあるか？」

「光る虫だっけ？　ないと思う」

「あれだ」

と、景春が指さした先には、ふよふよと漂う豆電球のような光がいくつもある。

「へえ……」

蛍は温暖な湿地に生息する昆虫だ。

天空山は乾燥地帯にあるので、いままで実物を見たことはなかった。

「きれいだね。ちよつとぼんやりしてるけど」

「日本ではこういう派手じゃないものをよしとする風潮があるんだ」

「そうなの？　甲斐馨はそういうイメージないけど」

「あいつは中国生まれ中国育ちだから……。その意味でいえば、いまの真武君は非常に日本人らしい日本人といえるだろうな」

「ああ、なるほど」

と、妙に納得してしまった。

鎮江楼で見た、木佐小次郎の端正な顔が思い出される。

しかし、

「ホークス君もすっかりあの人の虜だよ。中身はあんまり変わってないんだけどね」

碧霞元君にしてみれば、あの美形の顔の下には以前のちよつと偏屈なワーカーホリックがすっかり陣取っていて、そちらのイメージのほうが強い。

「そうなのか。俺は前世のほうを知らないからなんとも言えんが」

「緑麗もね。変わってないよ……ちつとも」

と、零す碧霞元君の瞳には憂いがあった。

「変わってないのに、呼び分けてるのはなぜなんだ？」

景春は、ちよつと不思議に思っていることを聞いてみた。

「甲斐馨？ いや、緑麗がそう呼べって言ってたから」

「……？」

「転生するとね、人は前世の記憶を忘れるわけじゃない？ そうすると、やっぱ

り前世は別人だと考えるんだよ。だから、前世の名前で呼ばれるのは嫌がるんだよね。中には面白がる人とか、名前なんかどうでもいいって考える人もいるけど。緑麗も何例か転生した人に会ってるから、その心情は理解していた。だから、自分もこれから輪廻の輪に組み込まれるけど、もし、転生後の自分に会ったら、そのときそのときの名前で呼んで欲しいって言ってたんだ」

「そうなのか。緑麗は輪廻否定派だったのか？」

「本音ではね」

「……？」

「彼女は、麒麟打倒のために自分は輪廻というシステムを利用するから、表向きには否定しないけど、個人的には何度も生まれ変わって人生をやりなおさなきゃいけないのはハードだと言っていた。だから、私の計画には協力する、と」

確かに、緑麗は輪廻がなければ余計な仕事をしなくて済んだはずだ。

彼女の享乐的な性格を考えれば、そうなるのだろう。

「……計画？」

「そう。人を不幸にするシステムを終わらせる計画。でも、その判断は難しいか

ら、私たちは多数決にすることにしたの」

碧霞元君は計画の全容を景春に話した。鎮江楼で、木佐と白帝君に話した内容と同じだ。

「……だから、甲斐馨に最終的な決定権がある。緑麗も未来の自分の決定に任せる、と言ってくれた」

「……」

景春は蛍の舞う暗闇を見ていた。

いまは戦闘用の装束も着ていないし、いつもの大刀も携えていないので、オフのサラリーマンに見えなくもないが、その険しい瞳はいつもと同じだった。

「それが、水晶宮で会ったとき、はぐらかされた例の約束の内容か」

「そう」

「なぜ最初に聞いたときには教えてくれなかったんだ？」

「いきなり『輪廻転生のシステムを終わらせる』と言っても、東方軍大将には理解できない話だと思ったから」

「ではなぜいま喋る気になった？」

「いまなら少しは理解できるんじゃないかと思ったから」

「……」

碧霞元君という女性の、どこか生き辛そうに見えた根元には、父親の犠牲になつた母親が居る。

それは理解できた。

しかし、やはり、

(ただの親子喧嘩じゃないか)

と思わずにられない。

その喧嘩の規模が一般家庭とは比すべくもないだけだ。

さらに、碧霞元君は擁護すべき母親に対しても憤りがあるらしい。

「旦那に愛想尽かしたんならさっさと家を出て行って、自分の人生楽しめばよかったのに」

景春は言っただけでやめた。

「あの時代、それができるのはかなり行動的な女だけだぞ？ あんたも少々世間を知らなさすぎるんじゃないか？」

「……」

数千年を生きてきて蛍を見たことのない女性が、世間知らずでなくてなんであらう。

本来ならムツとするとところを、

「そうかも」

と、碧霞元君は苦笑していた。

ホークス君が見たら驚いたに違いない。

3 小龍の主張

明けて翌日、深夜零時までには自由時間にしていたので、パーティーの面々は好き勝手に過ごしていた。

沙龍は偃月と共に藤四郎を誘ってランチに出かけた。

敖閏はひとりでフラフラしたいようだったので放っておいた。カフェでナンパしたり、観光地で俳優と間違われて写真を撮られたり、見た目アラファイフダンデーは色々忙しいのである。

景春は道場で師範代相手に汗を流していた。

そして、最後のひとり、碧霞元君はというと、近くの神社まで足を向けていた。

なにか引つ張られるものがあつたのだろう。

阿智神社あちという。かつて神谷百合子が巫女バイトをしていたところだ。

本来なら、碧霞元君はここでは厄介なよそ者である。いきなり道教世界の實力

ナンバーワンのような彼女が来たら、地元の神々は驚くし警戒するだろう。

しかし、不思議なことに、そういった刺々しい空気はなかった。

碧霞元君が「彼ら」に挨拶する前に、敖閏が話をつけていたようだ。

敖閏は甲斐弥太郎のことがあって以来、この地では八大竜王の客人とみなされている。

碧霞元君は、神社に入る手前で拱手してみせた。

「こんにちは」

境内でくつろいでいた、人ならぬ者が応じた。

「どなた？」

巫女の姿をしているが、これはあくまでも仮の姿で、本体は海のほうにある、と碧霞元君は分かった。

「私は碧霞元君。敖閏様の友人」

「ああ、あの龍王様の」

「彼とは来た目的が違うのだけど、しばらくお膝元を騒がしくします」

「龍を喚ぶのね？」

「はい」

「分かりました。わたくしどもにできることがあれば仰ってください」

それは社交辞令で言っているのではないと分かったが、さりとして全面的に善意で協力しよう、というわけでもない。

要するに、異質な力を持った部外者が厄介であることに変わりはなく、すみやかにお帰りいただきただきたいだけなのである。

「ありがとう」

碧霞元君はお礼を言って神社をあとにした。

その夜、再び龍王山山頂に集まった一同は、敖閏が「一度では無理かもしれない」と言っていたので、長丁場になることは覚悟していた。

景春は仕事なので何時間でも粘るつもりだが、偃月は眠そうな顔をしている。

自分にはあまり関係ないので正直言ってもう帰りたい、と思ってもおかしくはなかった。

暗闇だった。明かりは一切ない。

しかし、龍王宮と文字の彫られた石碑に立つ地霊だけは全身がボウッと光っており、その周囲だけは視界がきいた。さながら蛍のようだ。

「準備はできました。始めてください」

その地霊が言った。

沙龍が前に進み出てる。

そこからは黒々とした海が見えた。

スウツと息を吸い込み、教団から教わった祝詞を唱えて、また息を吐く。

それを何度か繰り返したがなんの反応もなかった。少なくとも沙龍が感じた数分の間には、空気すら動かなかった。

そのうちに意識がぼやけた。

沙龍が見ているのは、薄暗い、病院の診察室のようなところだった。

自分と、緑麗と、小龍が居る。視界は暗いが、どこかにほのかな光源があった。緑麗の金髪がそれに反射するように光っていた。

緑麗と小龍が話をしている。

「出ておいで、小龍。みんな待ってるよ」

「いやだよ。戦うのはいやだよ」

「戦うわけじゃない。あの亡霊を止めるだけ」

「いやだよ。もうなにもしたくない」

「じゃあ、そのまま寝てる？ 龍たちはみな居なくなるよ」

「かれはぼくたちを滅ぼす気はないんだよ。ただ自分がやったことが間違っていないと証明したいだけ」

「その証明ができなかったときは、リセットしてやりなおすつもりだよ」

「できるよ！ 確にかれは歴史を変えてしまったけど、そのせいで幸せになった人が多ければ、間違っていたわけではないよ」

「そう。じゃあ、それを証明するのを手伝って」

「……」

緑麗は、自分だ、と沙龍は思った。

いままでそう思ったことは一度もなかったが、ここにきて初めてそう思った。

いや、感じた、といったほうが正しい。

理屈ではない。小龍を説得している緑麗は、自分の姿なのだ。ただ、それを少し外側から眺めている別の自分が居るだけ。

視点を変えるだけ。

それだけだ。

「戻っておいで。また一緒にのんびり暮らそうよ」

緑麗は根気よく何度もそう言っていた。小さな子供を諭すように。最終的には小龍も折れた。

「わかったよ。少しなら手伝ってあげる。でも、約束して、緑麗」

小龍が今度は沙龍を見て言った。

「約束？ なにを……？」

声を出して聞いてみる。

「あのひとは『かれ』と同じ血を持っているから、本来ならこの星の命運を決める権利がある。だけど、あのひとはそれを放棄したんだ」

「……元帥のことね？」

小龍が頷いた。

「ぼくは『かれ』に星の権利を奪われ、『あのひと』にその権利を返してもらった。だから、代わりに、ぼくはあのひとの願いをかなえてあげるためにそばにいる。あのひとが望んでいるのは、あなたを『生かすこと』だけだよ。決して『ころすこと』じゃない」

「……」

小龍の丸い目がほほ笑んでいた。

「だから、信じてあげて」

小龍がそう言ったところで、電池が切れたように意識も視界も真っ暗になった。

沙龍は神谷邸の客間に転がっていた。

偃月がそばに居て、携帯端末を見ていたが、沙龍の目が覚めたのを見て、

「気付いたか」

「あれ？ いま何時？」

「朝八時」

「はあ!？」

言われなくても朝であることは分かるが、いつのまに八時間も経ったのだらう。

「俺なんか哥々が寝てる間に風呂入って眠って起きて走って来てシャワー借りて朝ごはんもらっていまコーヒー飲んでるところやねん」

「……そのへんな関西弁はどこで仕入れた」

沙龍はボーっとしていたが、急に、

「小龍は!？」

と、思い出した。

偃月が沙龍のお腹のあたりを指さす。そこを見ると、緑色の小さな龍が丸まって眠っていた。

「……」

つまり、召喚は成功したようだが、沙龍はまったく覚えていない。

偃月に聞けば、沙龍はきっちり手順通りに祝詞を唱えていたし、小龍が現れた

ときもちやんと抱きとめていたらしい。

黄龍召喚のときもそうだが、いちいち意識不明になるこの体質はどうにかならんものか、と思った。

「私も朝ごはんもらいに行こうつと……」

座卓には低血圧の碧霞元君だけが居た。目がまだ半分開いていない。

「おふあよう。昨日はお疲れ」

向こうから声をかけてきた。年功序列だの、官位だのといったこだわりはなさそうである。

「オハヨー。イケメンおふたりは？」

「あ、たぶん敖閨様は朝の散歩かなんかで、東方軍大將は道場」

景春は、昨日、師範代に居合のイロハを教えてもらって、日本の剣術が面白くなつてしまったようだ。

いまは藤四郎に直接教わっているらしい。

「敖閏様がイケメンなのは分かるけど、東方軍大将もそうなの？」
碧霞元君が真面目に聞き返してきた。

「いや……、どうだろう？ ノリで言ったただけだから……」

「そうなんだ」

「それに、そういうのって主観だから……」

「そうなんだ」

「……」

やはりこの『お嬢』はズレている、と沙龍は思った。さもなりなん。学校に通ったこともなければ、同世代の友人知人も少ないとくれば、感覚はズレるだろう。

「小龍は早く天界に戻った方がいいね」

碧霞元君が言った。

「……？ 地上の空気が合わないとか？」

そういえば、以前、龍族は天界にしか住めない、といった趣旨のことを聞いたことがある。あれは、そういう意味なのだろうか、と思ったのだが。

碧霞元君の答えは明快だ。

「いや、そうじゃなくて。盤古がいつ暴れだすか分からないから」

「ああ、なるほど……」

小龍は盤古対策なのだから、九雷のそばに居た方がいいという話である。

「龍族って地上には住めないの？」

沙龍は聞いてみた。

「そんなことないと思うけど……。敖閏様、フラフラしてるじゃん」

「あ、そうか」

「まあ、寿命をまっとうするまで地上で普通に暮らすってのは色々制約あつて無理だろうけど。既にここには人間社会があるわけだし」

「そうだね」

「誰かが、龍族は地上には住めない、みたいなことを言ってたの？」

「うん、欽チャンが」

「ああ、南海龍王か。なら、彼女は自戒の意味で言ったんじゃないかな。限られた場所にしか住んじやいけない、っていう意味で」

「……？」

「初代南海龍王が、龍族の行く末を案じて色々暴走したのは知ってる？」

「ああ、ちよつと聞いたことがある」

確か、水晶宮の『五行砲』を作ったのもその初代南海龍王だ。

「初代南海龍王はすごい選民意識の強い人だったから、龍族の中でも嫌われて孤立してた。先代は初代に近いね。いまの龍王はそこらへんを憂いてるだけでしょ」

まるで見てきたように言うので、沙龍は聞いた。

「シアランはそんな昔から生きてるの？」

確か初代龍王は何十億年前という昔の話ではなかったか。

「違うよ。私が人より色んなことを知ってるのは五行の気脈に身を浸して生きてるせい。『彼ら』がすべて教えてくれる。有機、無機、生、死、魂魄、歴史。

すべてのものが混ざり合っているのが五行の気脈」

なにやら壮大な話を、寝ぼけ眼で味噌汁飲んでる少女が語っている。

「まあ、龍族がそうやって二極化しちゃうのは歴史的にはしょうがない面もある

んだけどね」

碧霞元君は、低血圧の頭で、天界では「トップシークレット」とされる話をしてくれた。

混沌は天地開闢のときに消えたと言われていた。それこそが始祖による改ざんされた歴史である、と。

そして、この星がもともと龍の惑星であったこと、それゆえに、混沌は龍という形態をとること、混沌こそがすべての龍族の祖であること、その混沌がいまは小龍として存在していること――。

それらを知る人は少ない。

「まあ、今回のことでだいぶ流出しちゃったし、『霸王』を飲んだ人は知っているただらうけどね」

「『霸王』……、南海のお酒だよね？」

「そう。あれは一万年に一度しか採れない『南海の真珠』を溶かして作られたお酒。その真珠は天地開闢の歴史を記録している。あれを飲むと知らなくていい歴史まで知ってしまう」

「そうなのか！」

なるほど、その特殊効果があるから『霸王』は貴重品なのだろう。

（太上老君が持っていた、ということは少なくとも彼は飲んで知ってるんだろう。あれを盗み飲みしていた緑麗も……）

「でも、なぜそんな話を私に？」

「あなたは、知っておくべきだと思うから」

「……」

沙龍は改めてこの四行マイスターを見た。

しよぼしよぼした目でおしんこをつまんでいるが、思考はかなりクリアのようだ。

「『知らなくていい歴史』ってのは、小龍が龍族の祖だってこと？」

「そう」

「なんで？ たいしてタブーにも思えないんだけど」

「いま自分たちの世界を統治している人が実は征服者の末裔で、本来は自分たちこそがこの星の覇者だった——って知ったら、どうすると思う？ 龍族の反乱の

恐れがあるからその事実を封印したんじゃないの？ だから、代々の天帝たちは、龍族に気を使い、龍王家を特別扱いしてきたんだよ」

「フーン……」

沙龍にとつては、あまりピンとこない話だった。

その後、朝食を食べ終わった頃に、門弟の若者がやって来て、「先生が稽古相手をしろと言ってます」と言うので道場に行ってみれば、景春しかおらず、室内の隅っこに連れていかれた。

「な、なに？」

「すまん、ここなら碧霞元君は近づかないだろうと思って呼んでもらったんだ」
その口ぶりからして、稽古相手云々というのは口実のようだ。

「お前は小龍を連れて一刻も早く帝都に戻ってくれないか？」

景春は第一声そう言った。

「うん、まあ、そのつもりなんだけど……」

「俺はしばらく碧霞元君に張り付いて、時間稼ぎをしようと思う。敖閏殿がなにか考えがあるようで、出雲に行くと言っている。それに着いていく」

「出雲？ 考え？ そういえば西海龍王はなんでここに居たんだろう？ お母さんと私を引き合わせるためってわけでもないだろうし……」

「出雲行きは、倉敷に来た目的と同じだろう。俺の受けた報告だと、敖閏殿は日本に来る前に泰山府に寄ってる。たぶん、あの親子喧嘩絡みだ。とすれば軍部とは利害関係が一致しているはずだ」

「そっか……」

これは任せておいていいのでは、と思えた。

敖閏がすることなら私利私欲ではあるまいし、景春がそう判断したのなら沙龍は支持するだけだ。

「沙龍、四方軍のほうはもう西も南も大将が戻ったので大丈夫だ。助かった。いまさらだが礼を言っておく」

景春があらたまって言った。

「いや、あれは……」

自分の都合で——自棄ともいうが——引き受けたただけだ。礼を言われる筋合いではない。

「出雲にはいつ出発するの？」

「さあ、敖閨殿がまだ調べたいことがあるって言うてたから、今日明日ではないだろう」

「そっか。じゃあ私はシアランに気付かれないようにこっそり帰るよ。ユエはしばらくじーちゃんと遊ばせておく」

久しぶりに来たのにたった二日の滞在では藤四郎にも悪いだろう。幸い、偃月は人当りはいいし、藤四郎の「甲斐弥太郎像」を上書きするにはうってつけの人物だ。

「ユエが出雲にも行きたいって言うたら連れてってあげて。ああ見えても剣の腕はいいから」

それは景春にもすぐ分かった。身のこなしで力量は測れる。

「こんなこと頼める義理じゃないが、盤古の件は、小龍を使ってなんとかしてみてくれ。陽輝と敖丁はこき使っていていい」

「二人ともまだ重症なんじゃないの？」

沙龍はそう聞いている。

「知るもんか。あいつらは俺には大きな貸しがあるからな」

その言い方は怒りに満ちていた。

殴られた後頭部がうずくのかもしれない。

「こつちのカタがついたら俺もすぐ帝都に戻る。それまで持ちこたえてくれ」

「うん、分かった。なんとかしてみる」

以前は「女はひっこんでろ」といわんばかりだった景春が変わったものだ――

――と沙龍はこっそり留飲を下げていた。

しかし、実をいうと、景春のこれは同属意識から来ている。

たとえ一時でも『同じ釜の飯を食った仲間』は無条件で信頼する、という軍人特有のアレなのだ。

沙龍がいなくなったあとの神谷邸では、偃月が立派に孫役を務めていた。もともと、沙龍よりも人付き合いは得意だし、その姉には「天然タラシ」とまで言われている。なにかと孤立気味の碧霞元君にも同級生のように接して、パーティーのムードメーカーになっていた。

「じゃあ、爺々、^{イエイエ}ちよつと行ってきます」

藤四郎には帰りにまた寄る、と言って、偃月はやはり出雲行きに着いていった。じつとしているのは苦手なのだ。

倉敷から出雲まで実はそんなに遠くないが、高速道路はないので、国道を使うと三時間ほどかかる。

しかし、むしろ時間がかかるのは歓迎なので、敖閏はレンタカーでのんびり行くことにした。

敖閏と景春の間には、了解事項がある。

それは、

『碧霞元君の例の計画をなんとかやめさせる』

ということだ。

そもそも、敖閏はそのためにはるばる日本までやって来たのである。

しかし、碧霞元君自身はその二人の思惑には気付いていない。敖閏の『日本の神様に挨拶に行くから一緒に行こう』という言葉を信じて付き合っているのだ。

沙龍と小龍がいなくなったことは気にしていない。小龍は早く帝都に戻ったほうがいい、と言ったのは自分である。

ただ、なぜ景春がこの一行に居るのかは気になっている。むしろ、彼は沙龍と共に帝都に戻りたかったのではないか。碧霞元君はそう思っていた。

「龍王様、わいも運転できるから、疲れたら交代するで〜」

ワンボックスカーの後部座席で碧霞元君とトランプをしている偃月が言った。どこかで仕入れてきたヘンな関西弁のままだ。

「ありがとう、お喋りしてたらすぐ着くけどね」

敖閏は運転するのは苦にならない性質だ。晶都の屋敷にもズラリと高級車を並

べているくらいである。

景春は助手席で地図を見ていた。眼鏡をかけている。変装ではなく老眼なのだ。天界住民たちは見た目はアテにならないので、景春も四十代くらいに見えても、中身はだいぶ年寄りである。

「出雲の状況ってどうなってるの？」

碧霞元君が聞いた。

数年前に、アマテラス率いる極東勢と戦った景春は当然この国の神魔情勢を詳しく知っている。が、言葉少なめに説明した。

「いまは穏健派しか残っていないだろう」

「そうなんだ。……で、わざわざ挨拶に行くのは？」

と、今度は敖閏に聞く。

「まあ、ついでっていうか、物見遊山っていうか」

「ふーん……」

敖閏が向かったのは東出雲町と呼ばれている場所である。

そこになにがあるのかといえば――。

「さて、着いたよ」

敖閏が車から降りて空を仰ぐ。市内はどんよりと曇っていた。

歓迎はされていない、と分かる。

「ここは僕たちにとってはアウエーだからね。偃月君が希望の架け橋」

「え？ そうなん？」

本人はなにも分かっていない。「わーい、観光だー」と、着いて来ただけなのである。

「君は、リリちゃんやお祖父さんいわく『甲斐弥太郎さんにそっくり』らしいから、たぶん向こうさんも手加減してくれるだろう」

「ん？ いきなり弥太郎さんの話？ 向こうさんって誰？」

「ごめんね、黙ってて。説明すると面倒くさがって来てくれないんじゃないかと思ってる」

敖閏はニコニコと笑っている。

なるほど、噂通りの曲者だ、と偃月は思った。自分の血がなにかに利用されるようだ。フム、ならば少し様子を見るか、となるのが偃月である。

碧霞元君も事態はよく分かっているのだが、

「なんかくるよ」

上を見上げて言った。

奇妙な力がいくつかざわざわと動いているのは分かる。

碧霞元君が視線で指した先では、灰色の分厚い雲がぽっかりと口を空け、そこから一条の光が斜めに走った。

光が指し示した山腹は、さつき景春が地図で見ていた場所だ。

「あそこに来い、ということか」

景春はトランクから自分の大刀を取り出し、さらに、

「偃月」

藤四郎から預かって来た日本刀を偃月に渡した。

「……？」

「武器ならだいたい使えるだろう」

いつも使っているものと多少勝手は違うだろうが、なにかあったらこれで戦え、ということらしい。

こんなものを渡されたら、受け取って戦うしかない。

「よっしゃ、鬼退治か！」

「違う」

景春にドつかれた。

敖閏が出雲行きを決めたのは、甲斐弥太郎はどこかの神域に隠れているのではないか、と思っただからである。

冥府の役人を買収して、甲斐弥太郎死亡時から現在までの転生リストと、冥府内で待機している魂魄のリストを調べても該当者なしだったので、恐らく彼の魂魄は地上にあるのだろう、と。

しかし、一番思い入れのある人のそばには現れていない。

ならば、自分たちには見通しのきかない日本の神々がかくまっているのではな

いか、と思い、八大竜王に聞いてみると、確かに出雲になにかしらの気配があるという。それに賭けたのだ。

導かれた山道はそれほどけわしくはない。ハイキングコースのように舗装されている。

「敖閏様、なにか企んでますね？」

山登りの最中に碧霞元君が聞いて来た。恰好はいつもの白い上衣に青い袴姿に戻っている。なぜならここは既に神域で、彼らの変装も解けるからだ。

「うん。ちよつとね」

「私に関係のあること？」

「うん。大いにあるね」

「なぜ？」

なにをしようとしているのか、ということより、なぜ自分に関係のあることをしようとしているのか、のほう碧霞元君は気になった。

「前に言ったと思うけど、僕の原動力は僕個人の『情』で、それは緑麗ちゃんの運命を狂わせてしまった先代が原因になっている」

「それは、龍族特有の、一族の罪を背負ってしまうという話なの？」

碧霞元君は、その性質を酔狂なものだと思っている。

親の罪は親の罪である。子が背負う必要はない。

「まあ、そうなんだろうね。碧霞ちゃんには理解できないかもしれない。でも、もつと簡単に言えば、結局、父性愛だよ」

「ああ、それならなんとなく分かるかな……」

碧霞元君はそう言って、敖閏が自分にないを望んでいるのかを理解した。

「つまり、甲斐馨を殺人鬼にするなってことか……」

深く深くため息をついた。

これは碧霞元君が数千年をかけて準備してきた計画である。

緑麗の『麒麟殺し』の計画よりもはるかに長い間、自分はこれに心血をそそいできたのだ。

その計画をいまさら辞められはしないが、数少ない親しい人が憂いていることを知るのはいやこたえる。

「緑麗ちゃんを泰山府君の敵にしないためには、君を救わなきゃいけない。碧霞

チャンは病んでるつもりはないって言うかもしれないけど」

「……」

「逃げたければ逃げてもいいよ。君にはそれができる」

敖閏はそう言った。

しかし、

「いや、むしろ、興味がある。敖閏様はどうやって私の計画を阻止するつもりなのかって」

「……そう、とても難しかったよ。どうすればいいのか、いまだに分かってるわけじゃない。でも、唯一、解決策があるとしたら、これしかないかなって」

敖閏は立ち止まった。

数メートル先に、向き合うように偃月が立っている。

碧霞元君は、

「あれ？ さつき後ろに……」

後ろを振り向いたが、こちらにもちゃんと偃月が居る。当人はお菓子を頬張りながら歩いていった。

「……!?」

同じ顔だが、前方に居る方が顔の輪郭がやや細い。

「敖閏様、お久しぶりです」

偃月と同じ顔をした青年が、拱手しながら言った。

「うん。君に会いにきたよ」

敖閏は神谷百合子のときと同じことを言った。

「まあ、各自聞きたいこともあるだろうけど、ちよつとその前に、父子の対面をさせてあげていいかな？」

事情を知らない碧霞元君でもその意味は分かる。

この青年は偃月の父親なのだ。

偃月もそれはすぐに分かった。会ったことも、写真を見たこともないのだが、それほどに彼は自分に似ている。

「弥太郎爸爸……？」

そう呼び掛けると、青年はにっこりと笑った。

黒い道着に黒い袴をはいているが、全身がほのかに光っている。既に肉体はないのだろう。

「そうだよ。偃月。ごめんね。もつと早く、君が小さい頃に会いたかった。いま

はもう、抱きしめてあげることもしかない」

「いやあ、会えただけでも驚きやねん。哥々も……、あー、えーと、姉も連れてくればよかったわ」

弥太郎はそれを聞いてふっと悲しそうな顔をした。

「……あの子は、私を許してくれるだろうか」

「え？」

「彼女には過酷な運命を強いてしまった。あの子が自分の手でその運命を切り開いていったのは知っているけど、私は恨まれても仕方がないことをしたと思っっているよ」

「そ、そうかあ？ 哥々に限ってそんなことはない気がするけど……」

偃月が軽く言うのを、弥太郎は気遣いなのだと思った。

「香林は本当に素晴らしい女性だったよ。僕の子供ふたりを、こんなにも面白く育ててくれたんだから」

「アハハ、香媽媽ママなく。修行はめっちゃ厳しかったけどなく」

生き別れの父子の対面ではあったが、偃月のカラツとした性格のおかげで、も

のの数分で済んでしまった。ある意味、偃月もドライなのだろう。

「敖閏様、お時間を取っていただきありがとうございます。それではご案内します」

甲斐弥太郎はそう言って、山道を登って行った。

弥太郎が導いたのは伊賦夜坂いふやざかという処だった。

日本神話で『あの世』の入り口とされている場所である。

どうやら『そこ』に向かうようだ。

碧霞元君は少し嫌な予感がした。

「この先には私にも制御できない物の怪たちが居ます。あなたがたにとっては吹けば飛ぶような相手ですが、中には多少狂暴なものも居ますので、ご注意ください
い」

弥太郎がそう言うと、景春は自分の仕事とばかりに大刀を腰から外して前に出た。

「偃月、手伝え」

「よっしゃ、鬼退治やな！」

「だから、モモタロウは岡山だけだ、と……」

外国人の偃月にとっては岡山も出雲も変わらないのだろう。

「じゃあ、お任せしようか」

敖閏と碧霞元君はVIP待遇に慣れているので、こういうときは特になにもしない。敖閏は一応、扇子だけ取り出していた。

碧霞元君は弥太郎に対して、さつきから感じていた疑問をぶつけた。

「あなたはどのような存在？ 魂魄状態にしてははっきり形をとりすぎているし、かといって死霊にも亡霊にも見えない」

「……」

弥太郎は少し困ったような顔をして、チラッと敖閏のほうを見たが、

「えーと、ごめんなさい。いずれお話します」

正直に「言えない事情がある」ということを白状した。

「あ、そう……」

そう言われては問いただすこともできない。この素直で弱気な性格は甲斐馨にも李偃月にも受け継がれていないな、と碧霞元君は思った。

その数メートル先ではすでに阿鼻叫喚やらなまぐさい金属音が聞こえているが、景春も偃月もどこか愉しんでやっている。

弥太郎が言っていたように、確かに多少てこずる手合いも居た。

それら物の怪は、間違つて入り込んできた人間を追い返すために設置されているわけではないだろう。それならば、もつと見かけだおしでいいはずだ。

つまり、自分たちでさえてこずる物の怪を配置しているということ、この先に『決して外に出してはいけないもの』があるのではないか、と景春は思った。

伊賦夜坂いふやざかはゆるやかな下り坂になっている。

物の怪の出現は入口付近だけで、その後はしばらくこの坂を歩くことになった。

降りきった場所には小さな湖があり、その水面や上空には蛍のような光が無数に漂っていた。その数、数千、いや、数万かもしれない。景春と偃月はこれを見たことはない。普通に生きている者は見たことはないはずだ。

しかし、敖閏はついこの前、冥府で見た。

碧霞元君は常に見慣れている。

つまり、無数の魂魄——、である。

「着きました。ここが、日本エリアの『魂のるつぼ』です」

青いもの、やや赤みがかつたもの、白いもの……、その光の色や強さは様々で、彼らは、好き勝手に漂いながらも、目指している場所は同じで、寄り道したり、反発したりしながらも、最後はその湖の中へ吸い込まれていくのだった。

「……」

碧霞元君は、その光の軌跡を見ている敖閏をじつと見た。

その視線を受けて、敖閏はやつとここに来た理由を話し出した。

「これから話すこと体験することは全て景春君にも偃月君にも同席してもらおうと思う。たぶん、碧霞ちゃんに足りないのは、そういう第三者たちだとも思うから」

「……?」

碧霞元君は怪訝な顔をしたが、情報公開が大事、という考えは否定しない。

自分だって、公正なデータを取って来たのだ。それはいつでも開示できるし、また、しなくてはならない。

敖閏は続ける。

「僕も最近知ったんだけどね。北半球の泰山府君の支配する冥府というものは全てどこかでつながっていて、恐らく、ここも、僕達がふだん見慣れている帝都のどこかの場所とつながっている」

「死者の行く場所ってことか」

偃月は興味深そうに水面をのぞき込んでいた。

「そして、最終的には、死した魂魄は再生工場に送られる。もしくは、『完全な死』を望む者だけが送られるという冥府最深部の『廃棄工場』へ——」

敖閏は扇子を少し広げ、口元を隠しながら話した。

それは貴族の所作だが、本当のところは、碧霞元君に先を読まれないためだろう。

「でもね、本当は『廃棄工場』は建てられてから一度も使われたことはないんだよ。もつと言うと、工場の中身は空っぽで、なにもない」

「……」

偃月にしてみれば「へえ〜」という感想しかないだろうが、碧霞元君にとって、その事実は驚愕でしかなかった。

そんなことはいままで誰も教えてくれなかった。当然だ。

完全な死を迎えた者が誰かにそれを教えられるはずはないからだ。碧霞元君の理解ではそうだった。

しかし、そうではない。

そうではないのだ。

『完全な死』など、ないのだ。最初から。

敖閏はそう言っている。

「どういうこと……？」

「つまりね、不可能なんだよ。魂魄は流・転・す・る・よ・う・に・し・か・で・き・て・い・な・い」

「……」

「だから、『完全な死』を望む者が居て、『廃棄工場』に送られても、そこには誰も居ない。工場の中には何も無い。やがて泰山府君が迎えにきて、再生工場に

送り返されるだけ」

「……なぜ？」

「僕もそう聞いた。泰山府君に。なぜそうなってる？ と。彼曰く、『魂魄は最初からそうだった』と」

そのとき、碧霞元君はあることに気付いた。

「ちよつと待って……。魂が不死だとしたら……。『廃棄工場』が機能していないのだとしたら、私のお母さんは……」

「そう。『どこかに転生しているはず』と、泰山府君も言っていたよ」

「……！」

敖閏は予想外のことが起きたので、だいぶ挙動が遅れてしまった。いつなにが起きてもいいように扇子は半開きになっているが、それを使う必要はなかった。

むしろ、扇子を仕舞って、洒落たブランドもののハンカチを取り出すのに手間取ってしまったのだ。

碧霞元君は泣いていた。そのことに、自分でもびっくりしているようだった。

「……」

碧霞元君は、敖閏が差し出したハンカチを首を振って断り、目をこすった。

「そうか……。まだ私の知らないことがあるとはね……」

口調はいつもの通りだった。

「あとは弥太郎君に任せようかな。……いい？」

と、敖閏が振り返ると、黒装束の甲斐弥太郎が進み出て、湖の手前で止まった。

「はい。碧霞元君さえよろしければ」

「……？」

「この先がどうなっているのか、お見せします」

「できるの？」

「はい」

弥太郎が右手の掌を下に向けると、湖面が白く光った。

その光が膜のようにふわっと持ち上がり、ドーム状になって三百六十度、視界を覆い尽くす。幻覚のようで、そうではない。

弥太郎の声がある。

「肉体をここに置いて、意識だけを冥府内の空間に転移させます。敖閏様はお留守番をお願いしますね。一瞬ですのよ」

「うん、分かってるよ」

敖閏は一度体験しているのである。日本に来る前に、泰山府君に直接案内してもらった。

「冥府内の空間はゼロであり無限でもあります。ツアーの道程は長く感じるかもしれませんが、現実時間ではほんの刹那ですのでご安心を」

つまり、死した魂魄がどのように回収されるのかを見学させようということらしい。

「では、行きます」

「え？ 俺たちも？ って、諾否はなしかい——！」

偃月は叫んだが、本当に一瞬だった。

弥太郎の言葉と同時に、碧霞元君と、景春と、偃月の意識はフツと体から離れた。

彼らは光っている湖面を突き抜け、色々な風景を観ながら魂が辿る道を駆け抜

けた。

夜のネオン街、ヒマラヤの山々、田園、街、海――。

途中、再生工場がいくつもあつて、周囲の魂魄たちはそこに次々と吸い込まれていく。

「蛍みたい……」

碧霞元君はほんのり光る魂魄たちを、倉敷で見たあの蛍に重ねた。

彼らには個性があり、それぞれに事情があり、来世への希望や絶望があるということは、いくつもの魂と対話した碧霞元君は知っている。

そんな彼らに輪廻の是非を聞いて、データを積み重ねていっても、なぜかいつも50対50で数字は止まる。

母数を増やしても結局同じ現象が起こる。

男女の出生率のように、丁度半分づつになってしまふのだ。なぜかは分からない。だから、碧霞元君は多数決にすることにしたのだ。50対50の状態で最後の一票を沙龍に入れさせる。それでもう終わりにしたいのだ。

「ひゃー、驚いたな！ 本当に工場があるのか！」

偃月の意識体が、お菓子工場のような建物を見て言った。

「外観はね、多少、見る人によって違うの。でも傾向はある。あそこの工場は寿命でごく普通の死に方をした人が多く行くところ。だから、ファンシーな外観のはず」

碧霞元君は説明してやった。ここまでは自分もよく知っている。

「へえー」

問題は、この先の禁断のエリアだ。スタッフもごく限られた人数しか配置されていないと聞く。

「……？ なんだろう。重い」

そのエリアに入った途端、肉体はないはずなのに、肺が圧迫されるように感じた。

「ここからは五行は一切ありません。普通の人間はとても軽く感じるようですが、貴女の場合、逆になるようですね」

弥太郎が隣に来て言った。

「『虚無』か……」

東方天界の影響下ではない場所でも、たとえば水があり火が起こせるのなら、五行術は使える。

しかし、たまにこういった「なにもない」場所がある。人工的に作られたり、自然発生的に出現する場合もあるが、ここはどうやら泰山府君のお手製のようだ。

ここでは当然、五行術は使えない。無属性の泰山府君が一番力を発揮できる場所である。

なにもない、とはどういうことか？

時間もない。

空間もない。

では、生命はどうなる？

魂魄は？

死とは？

不死とは？

「着きました。ここが『廃棄工場』です」

弥太郎は先に立って案内した。

「本当に空っぽなんだ……」

誰も居ない体育館のように、そこはガラシとしている。スタッフでさえひとりも居なかった。

碧霞元君はこの映像がフェイクでないことは分かっているし、実際にリアルタイムの映像を見せられているのだということも分かる。

「ここが、そんなに問題か？」

景春がそんなことを言いだした。

「ペーパーカンパニーなんてよくあることだろう？ お上はいつも都合よく大衆を騙すもんだ」

「そうだね……。ちよつと規模が違うけど……」

碧霞元君は脱力しているようだった。

否、悟つたのだ。

生命の起源とそこからくりを。

敖閏が言っていたように、魂魄は流・転・する・よう・に・作・ら・れ・て・い・る・の・だ。

では、誰に……？

誰が魂魄をそう作った？

それを考えると脱力せずにはいられないのだろう。

それは、いふなればこの星の最高神よりもっと上位の存在だ（居たとしての話だが）。

「魂魄は不死なのです。ですから、輪廻転生のシステムはその魂魄の性質に合わせて作られたにすぎません。『魂の救済のため』というのは後付けの理由でしょう」

甲斐弥太郎はそう言った。

その言葉の裏にほんのりと漂う「泰山府君を敵視するのは筋違い」という大意を碧霞元君は敏感に嗅ぎ取った。

「……なら、このシステムを本当の意味で作ったのは『宇宙の意思』だとでも？」

「そういう言い方もありますね」

笑顔で肯定されてしまった。

「ただ、我々がそれを知る方法はないでしょう」

「不可知論ってこと？」

「そうです」

「……」

湖の場所に戻って来た碧霞元君は、敖閨を見てかすかに首を振った。その仕草にはいろんな意味が込められている。

「あなたは……何者なの？」

碧霞元君は改めて弥太郎に問う。

こんな離れ業をやったのけるのは只者ではない。

「私はこの支部の管理者です。泰山府君に魂魄のまま時間を固定してもらって、ここで、生前やり残した仕事をしています」

「時間を固定……、そういうこと？ 黄龍の力を借りているのね？」

「はい」

それは先代の黄龍の保持者だからできたのだらう。

時間の制約を持たない神獣は、保持者の老いを止め、死後の時間すらも止め

た。

「碧霞ちゃん、仕組んだのは僕だよ。弥太郎君を責めないで」

「分かってます」

敖閏は最初から甲斐弥太郎を説得役にするつもりだった。

なぜといえば、碧霞元君のこの呪縛は父親によってしか解除できない、と思っただからである。

しかし、実父との和解はもう不可能なので、父親に近い存在にその可能性を見出すことにした。

碧霞元君と沙龍の関係は、五行の中では姉妹といえなくもない。だから、沙龍の父である弥太郎なら、碧霞元君も素直に言うことを聞くのではないかと期待したのだ。

その弥太郎が偶然にも泰山府の仕事をしていると知ったのはつい数日前のことである。

それも厳密に言えば偶然ではないのだが――。

「やり残した仕事って？」

碧霞元君はまだ食い下がった。

「それは貴女がたにはあまり関係のないことですので……」

恐縮して言う弥太郎に、敖閏が言った。

「関係なくはないよ。黄龍の因子がこの国に持ち込まれたのは、大陸の権力者たちがあの力をわが物にしたいと追いかけたからだし、それだって、結局、玉帝と緑麗ちゃんのせいってことになる」

「まあ、そうだね。地上を巻き込んだのは天界側の都合だもん」

「そうですか。では、聞きたいのであれば、お話します。甲斐家の罪と、ここに封印してあるもののことを」

「……」

やはり、なにか外に出してはいけないものがあるのだ、と傍観者の景春は思った。

ところで偃月は、と見ると、いびきをかいて寝ている。

（大物だな、こいつは）

景春は笑っていた。

弥太郎が話したのは、最初に黄龍の因子を受け継いだ大和朝廷の一族と出雲の神々の間で交わされた契約のことだった。

時はおそらく七世紀頃。

強すぎる黄龍の力を畏れた神々は、当時の保持者に大陸の力をこの国で使わなかれと命じた。保持者はそれに応じたが、その代わり、そちらも黄龍とは戦わないうで欲しいと申し出た。

契約はそれで成立したはずだった。

が、双方にとって思わぬことがおきた。

日本の神の靈魂は特殊で、あらたま荒魂とにぎたま和魂という二面性がある。

不戦の契りをしたことで、神からその荒魂が消滅してしまったのだ。

一方、黄龍はなんの影響もうけなかった。誓約したのが保持者だからなのか、神獣にそもそも魂魄というものがないのか、あっても荒魂に相当するものがないのか。ともかく、不平等条約のような事態になってしまったのだ。

新たに黄龍の因子を受け継いだ甲斐家はそれを是正する機会もなく、大陸からの刺客や時の権力者から逃げ回ることとなった。

出雲の神々は、自分たちの荒魂を黄龍が吸収してしまったのだと思い（事實は不明なのだが）、報復も考えたが、力では敵わないことも理解していた。

それらの一連の出来事が、先の東方天界における極東勢の遠征の原因になっている。

「荒魂を奪われた神々の霊魂はなぜか死して亡者に成り果てます。それは本人にとっても、周りにとっても不本意でしょう。ですので『彼ら』の霊魂は冥府には行かせないよう、ここに封印しているのです」

弥太郎が湖の対岸あたりを指して言った。

祭壇のような場所がある。

「そういうことだったのか……」

景春が唸った。

それでもすり抜けて行ってしまいう霊魂もある。沙龍が京都で葬ったスサノオは、冥府内で亡者に成り果ててしまった。

「しかし、さつき敖閨殿も言ったように、これも元はといえば黄龍を地上に落とした天界側の都合じゃないのか？ 君たちに罪はないだろう」

景春の言葉に、弥太郎は首を振った。

「いいえ。甲斐家もまた神獣の恵みに甘んじてきたのです。同罪ですよ」

この儂げな謙虚さはなんだ？ 沙龍や偃月は母親似なのか？ と景春も思っ
た。特に、こんな場所で、こんな真剣な話をしている最中に呑気に寝ている偃月
は、絶対母親似に違いない、と。

「そう。あなたが誠実な人なのは分かった」

碧霞元君は深く息を吐いて言った。

「真面目で内省的なのもよくわかる。でもね——」

パチリ、と偃月は鋭い殺気で目を覚ました。

「あなたはそれを利用されたんだよ、泰山府君に——！」

碧霞元君がとても殺傷能力のなさそうな扇子で弥太郎に一撃をくわえようとし
たのを、偃月が抜き身の日本刀で阻止していた。

「俺の爸爸^{パパ}を殺すのはやめてくれないか？ まあ、こんな幽霊みたいな存在を殺
せるのかどうかも分かんないけど」

本気で弥太郎を殺す気だったわけではない。それは偃月にも分かったが、碧霞元君の殺意は本物だ。つまり、その殺意を向ける相手は弥太郎ではなく、泰山府君だということである。

「大丈夫だよ、偃月。刀を納めて」

弥太郎は涼しい顔で言った。

「^{パーパ}爸爸……」

この数瞬、弥太郎は身動きひとつしなかったのだ。

偃月がかばうのが分かっていたのか、それとも、碧霞元君が本気でないことが分かっていたのか。

実は、どちらでもない。

弥太郎は日中の武術を修めている。その腕は偃月にも沙龍にも劣らない。相手がたとえ五行術のエキスパートでも体術の素人なら動きは見切れるのだ。

偃月は言われた通り日本刀を引いたが、扇子を止めた部分の刃がボロボロになっっているのを見て「うわあ」という顔をしていた。

「碧霞元君、貴女は勘違いしている。私は泰山府君に一方的に使われているわけではありません」

「そう思っているのはあなただけじゃないの？」

碧霞元君も扇子は納めたが、声は刺々しいままだ。

「いいえ。ここの管理者をやらせて欲しいとお願いしたのは私のほうなのです。

泰山府君は私になんの要求もしていませんよ」

「……。気付いてないんだね」

碧霞元君はため息をついた。

いまの甲斐弥太郎は、いくら先代の黄龍の保持者だとしても、その潜在能力が高すぎるのだ。

「どういう意味です？」

「お客さん三人も連れて、冥府内を自在に案内するなんて、それこそ、冥府の創始者じゃなければできないよ」

碧霞元君には泰山府君の手の内が読めた。

「つまりね、自分が娘に殺されたとしたら、冥府を管理運営する者がいなくなる。そのための保険として、後継者を作っておいたってこと——」

おそらく泰山府君は自分の能力をひそかに弥太郎に分け与えたのだろう。

かつて碧霞元君が甲斐馨に自分の四行を分けたように。

「……」

弥太郎だけでなく、敖閏も景春も偃月も絶句している。

「しかも、本人には一切なにも告げずに。『そのとき』がきたら断れないような性格の人を選んだ——。どう？　それでも、なんの要求もしてない、と言い張る？」

「……」

しばらく、誰もなにも発言しなかった。

ここにきて碧霞元君は完全に萎えたといっている。

母親が死んで、悲しみと怒りに取りつかれた碧霞元君が「こんなシステムは終わらせてやる」と最初に宣戦布告したとき、あの父親は「できるものならやって

みる」という態度だった。

それから長い間、時に休戦し、時に激化しながら、この険悪な関係が続けてきたのだ。

それを今になって、相手は放棄するという。

気力も肉体も衰え、もう若い力には敵わないことを悟ったのか――。

弥太郎は静かに言った。

「たとえば貴女の言っていることが事実でも、私にシステムの運営は務まらないでしょう。また、その意思もありません」

「そう……」

「そして、同じく貴女が言ったように、泰山府君が後継を考えているのなら、彼はもう全てから降りるつもりなのではないでしょうか」

「……」

「それでも、老いた父上に追い討ちをかけますか？」

「……」

碧霞元君は素直に「分からない」という仕草を見せ、敖閏を見た。

その表情は、もういいよ、と言っている。まったくこの『お父さんたち』は…と愚痴をこぼしたいところだ。

景春は『二人の父親』に正論をぶちかまされた碧霞元君に同情気味である。助け船を出そうかとも思ったが、しかし、どう言っても、やはり、敖閏や弥太郎側の擁護になる。

ならば、もう本音でやり合うしかないだろうと思った。

「あんたは本当に父親を排除したいのか」
ズバリ聞いた。

「そう見えない？」

「ああ。そう見えないから聞いてる」

「……」

「だって、そうだろう？ あんたが本気になれば天界に敵は居ない。殺ろうと思えば誰だってすぐ殺れるはずだ。それを何年も膠着状態を続けているのは、迷っているからだし、本音の部分では父殺しをしたくないからじゃないのか？」

「……」

「最後の決定を沙龍にさせようつてのも、俺に言わせれば責任逃れにしか見えん。それにな、圧倒的な力を背景に決定を迫るのは——」

「ちよいちよい、東方軍大将——」

止めたのは偃月だった。ヤレヤレ、この堅物は女心が分かったらん、と言いたげに、

「あんたはあんたで、ちよつと女の子に厳しすぎやろう。そういう言い方したらあかんで」

「『コレ』が女の子に見えるなら、お前の目は節穴だぞ」

「ちよつと……」

碧霞元君は怒りかけているが男たちに無視された。

「うわあ、絵に描いたような朴念仁やなあ。女の人ほどんなに歳取っても若く扱わないといかんって教わらんかったか？」

「偃月君に一票」

敖閏も、一瞬で場を塗り替えた偃月に内心拍手を送っている。

「……」

景春はぐっと黙った。せつかく和やかになったところを蒸し返すのも野暮だ。落ち着いたところで、

「ここでの用が終わったなら、帝都に戻ろう」

と、提案をした。

「そうだね。いずれにしても甲斐馨には最後の問いをしないといけない」

碧霞元君は頑なにそう言う。景春がなにか言い返す前に、

「敖閏様、ありがとうございます。色々、心配かけてるのも、なんとかしようとしてくれるのも分かる。でも、私には私の義があるから、ケリは着けるよ」

「うん……、そっか。分かったよ」

あとは沙龍に任せるしかないのか、と敖閏は思った。

「それから、弥太郎さんも。敖閏様に頼まれたんだろうけど、真実を教えてくださいありがとうございます」

「お役には立てなかったようですが」

碧霞元君は首を振った。

「お戻りになるなら、せめて、近道をご案内させてください」

「近道があるの？」

「はい。こちらです。どうぞ」

と、弥太郎が開けたドア——さっきまではなかった気がするのだが——は、明らかに普通ではない。

「え、なんか、ちよつと、ヘンなものが色々はみ出してるんだけど……？」

碧霞元君は台所で動き回る例のアレを見るような目になっている。

水気の多い粘土のようなグチャグチャしたわけのわからないものから、血まみれのゾンビとしかいいようのない化け物の半身、触覚の生えた巨大ななにか——。

そういったものたちが、うめき声をあげながら、半分開けたドアから這い出てこようとしているのだ。

「この先は次元回廊になってます。居心地がいいらしくて、色々棲みついてますが、たぶん害はないと思いますので」

弥太郎がにこにこしながら言っている。

「……」

「……」

「……」

「……」

四人とも同じ——うわああ、絶対イヤああああ、という——顔をしているが、最初に腹を決めたのは景春だった。

「一本道か？」

「はい。帝都の北東エリアに着きます。回廊内に時間は存在しませんから一瞬ですよ」

「そうか。世話になった」

「ええっ!?! 行くんかい!?!」

偃月が叫ぶ。

「斬り捨てながら進むしかない。行くぞ」

と、果敢にもドアの先に入っていった。その直後にドスつとか、ザシユつという効果音がする。断末魔の悲鳴らしきものも。

「……さすが、職業軍人。ではね、弥太郎さん」

碧霞元君は扇子を取り出して、後につづいた。

「えー、碧霞チャン、たくまじすぎでしょー。待ってー」

と、敖閏は弥太郎に手を振りつつ、碧霞元君の後を追った。

「うわあ……、俺はとても無理」

偃月は中をのぞき込むようにしていたが、入るつもりはなかった。

しかし、弥太郎が、

「ほら」

ポンっと、背中を押してしまった。

「ぎああああ！　また諾否なしかい！　あーっ、俺、岡山のじーちゃんに挨

拶ーーっ！」

偃月の叫び声がしばらく残っていた。

「ホントに香林は面白い子に育ててくれたなあ……」

弥太郎はひとりで笑っていた。

7 帝都1

沙龍は岡山を発つとき、藤四郎には黙って出てきたが、神谷百合子には挨拶を
していった。

敖閏が居ないので姿は見えないが、龍王山の山頂で、
「お母さん、また来るよ。じーちゃんをよろしくね」

そう言っておいた。

百合子は聞こえていないのを承知で答えた。

「はい。お気をつけて」

それから急いで東京に戻り、羽田から成都に飛んで、そこからは黒焰虎に迎え
に来てもらった。

小龍はずっと沙龍のパーカーのポケットの中に居る。

「元帥はどうなったの？ 帝都は？」

黒焰虎に聞くと、

「九雷様はずっとお眠りになっています。命に別状はないと天真大夫が」

「そう……」

ひとまずは安心した。

「しかし、魁星様がミイラのように……」

「それ、どうでもいいよね？」

キツパリ言い切った。

水雲宮のシルエツトが見えてくると、沙龍はホツとしている自分に気付いた。いまの家はもうこつちなのだ。

しかし、沙龍は水雲宮には寄らず、直接九雷の居る雷城に行くことにした。初めて行く場所だが、たぶん大丈夫だろう。

と、思いきや、そう簡単にはいかなかった。

LAのビバリーヒルズ、東京の南麻布、パリの16区（※いずれも超高級住宅地）に勝るとも劣らないと言われている玉清境ぎょくせいきやうである。セキュリティも超A級だ。

沙龍と黒焰虎は、楼門の脇にある派出所でやんわりと止められた。

制服を着た若い警備員がマニュアル通りに「どちらまで？」と聞いてくる。

「……」

顔を知られていない沙龍に「顔パス」はできない。いまは「将神緑麗」と名乗らなければならぬわけだが、沙龍にとってそれはため息をつきたくなるような展開だ。なので、代わりに四神府発行のIDカードを提示した。

「元帥官邸まで」

「ハッ……失礼しました」

いままで胡散臭そうな目を向けていた若い警備員が姿勢を正して敬礼した。

「緑麗様……」

沙龍の不機嫌な空気を察して、黒焰虎が身を寄せてきたが、

「大丈夫。行こう、黒焰」

雷城はすぐそこだ。瑠璃色の屋根の優美な建物群が見えている。

門前に到着すると、タイミングをはかったかのように屋敷の中から老齢の男が出てきた。こちらは沙龍の正体を心得ているようである。

黒焰虎の姿が監視カメラに映った時点で、特定はできていたに違いない。

「お初にお目にかかります、緑麗様。当家の執事でございます。天真大夫がお待ちです。どうぞ、奥へ」

「ありがとう」

二階の部屋に案内された。

ここには天真が二十四時間詰めている。看護師も数人居て、交代で容態をチェックしているようだ。

「顔色はあんまりよくないね……」

九雷の顔を久しぶりに見た気がした。

しかも、寝顔は普段でさえもほとんど見ないので、この豪華な見慣れないベッドに寝ているのは誰か別人ではないか、という気もする。

「状態はずっと変わってないんですよ」

白衣の天真が言った。

「そうなんだ」

「魁星が意外にもしぶとく頑張っているようですね」

と、隣のストレッチャーを示した。そこには、骨と皮だけのような魁星が眠っ

ている。いつもの血色のいいツヤツヤした肌が土気色になっていた。

天真は、

「ちよつとこれを持っててください」

と、沙龍に鎖のついたものを渡した。認識票である。

「……？ 元帥のドツグタグ？」

「そうです」

「……？」

とりあえず受け取ったが、天真がいつになく真剣な顔をしているのが気になる。

形見として持つてろという意味ではもちろんないだろう。

「緑麗」

「……？」

珍しいな、と沙龍は思った。

天真はずっと沙龍のことを『公主』と呼んでいた。それは最初に会ったときに「緑麗」と呼ばれることに難色を示した沙龍への配慮だったのだが――。

「たぶん、なんですけど、魁星の様子からすると、結構やばいことになってる気がするんです。でも、盤古は出てこない。ってことは『中』で九雷と盤古が対決してるんじゃないか、と」

「うん……？ それで？」

「だから、行って、助けてあげてください」

「私が行っても力にならないんじゃない？……？」

「なりますよ」

「そ、そう？」

「……」

天真はいつのまにかピコピコハンマーを手にしている。

そして、ニコニコといつも笑顔で、

「大丈夫。痛くないですからね」

「待っ……」

沙龍は叫ぼうとしたが、遅かった。

ハンマーは間抜けな音を立てて沙龍の頭上に振り下ろされてしまった。

「ドクターのうそつき……」

けっこう痛いじゃないか、と沙龍は思った。

ひんやりとした床の上に突っ伏しているが、それが果たして床なのか壁なのかは分からない。もしかしたら天井かもしれぬ。

手首を動かすと、鎖の音がした。

(ドツグタグ……)

腕輪のように三重巻きくらいにしてあったが、なくすといけな思っ、首にかけなおした。本来はそう使うものだ。

しかし、たとえばいま不慮の事故で亡くなったりしたら自分は『九天応元雷声普化天尊』として埋葬されてしまうのか——。そんなことを考えながら、よっこらせと立ち上がった。

(これが、元帥の见ている夢……?)

夢の世界など来たことないので、ここが本当になのかは分からないが、ご

く普通の世界に見える。

まず、自分が寝ていたのは屋外の石畳だ。

時間は夜で、あたりは暗いが、どこか近くに灯りがある。電灯ではない。揺れているので炎だろう。

すぐ横にやはり石の建物がある。

ずいぶん古い建築様式だというのは分かるが、歴史にはあまり詳しくないので何世紀のどこ様式、とは言えない。が、少なくとも日本や中国ではないな、と沙龍は思った。

「まったく、アルベルト卿はいったいどういうおつもりなのか！」

カツカツという靴音と共にそんな声が聞こえた。

「大変なことになったな。ヴァレフスキの家はお取り潰しか」

二人の男が歩きながら話しているようだ。

沙龍は咄嗟に身を隠したが、これは夢の中の出来事だと気付いた。

ならば、気付かれるはずはないし、この映像は、夢を見ている人物——おそらく九雷だ——の視点である。

そのとき、すぐ隣で別の声がした。

「いいのかい？ って、やっちゃったあとに聞くことでもねえんだがな」
遊び人風の男がそんなことを言っている。

「報告は……まあ、一応しとかなないとだめだろうな。陛下も分かってくれるだろうさ。無能な官吏が一人おっちんだだけだ」
じゃあな、とその男がこちらに挨拶をする。

(なに……？ この展開？)

夢世界なのだから説明のつかないことも起こるだろう。

沙龍はその場をサッと離れて、安全な場所を探そうとしたが、その途端に場面が変わった。暗転。まるで演劇の舞台に居るようだ。

しばらくあてもなくその暗い場所を歩いた。

空中に3Dのスクリーンみたいなのがいくつもあって、そこに映像が映し出されている。さつき居た場所もそのひとつなのだろう。どうやって抜け出したのかは分からないが。

複数のモニターに映し出される映像は次々に切り替わるので落ち着かない。

場所も時代も登場人物も様々で、一貫性はないのだが、それらは全て九雷が見ている夢の断片なのだろう。あるいは既に見た夢か――。

(元帥はどこに居るんだろう?)

沙龍は服の上からドツグダグを握りしめた。

そのとき、

「キュワ？」

お腹あたりのポケットの中から寝ぼけ眼の声がした。

「小龍!? お前、一緒に来ちゃったの!？」

緑色の顔が出てくる。

「キュワ？」

そうだった。小龍はずっとここで寝ていたのだ。天真にはそれを説明する暇もなかった。

「あら、大丈夫なんかね……。まあ、でも一人より二人のほうが心強いかな」

九雷の夢の断片には知ってる顔も出てきた。陽輝、天真、そして、緑麗――。

やはりこの三人が多いのだが、それよりも登場回数が多いのが、

(玉帝……)

先の天帝なのである。

仕事で——とりたいが——一緒に居る時間が多かったせいなのか、玉帝がひんぱんに出てくる。

そして、玉帝は九雷になにか言っているのだ。それらは聞き取れたり、意味不明だったりする。

(もしかして)

沙龍はふと閃いた。

(ここはフォルダー内みたいな場所で、いままでに元帥が見た夢は全部保存されているのでは?)

だとすれば、それを読み込んだり、検索したりもできるかもしれない、と思ったのだ。

(ルーシア・フォン・クリストフの夢があるなら、元帥が彼女を殺した一件の真相が分かるかもしれない)

あくまでも夢としての記録だから、事実の再現ではないかもしれない。

しかし、それでも沙龍は知りたい、と思った。九雷がその件に関してどう思っているのかくらいは分かるはずだ。

「あれ……？」

流れ去る景色の中に、一瞬、妙なものを見た気がした。

ツツツ、とカニのような足取りで後戻りしてみると、そのサムネイルのような数秒の映像は繰り返しループしていた。

上海の夜景である。人物のバックに映っているのは有名な外灘だ。江海関の時計が見える。

そして、中央の人物は紛れもなく十歳くらいの自分である。

「……？」

なぜ九雷の夢にこんなシーンがあるのだろう。

映像の中の自分は、最初、こちらには気付いていない。そして、呼ばれたように振り向くのだが、それは知り合いに会った顔ではない。誰か知らない人に声をかけられて、少々不審な顔を見せている、というシーンだ。

「……」

この上海の映像も気になるが、やはり、ルーシア・フォン・クリストフ関連の夢を探そう、と思った。

天真に言われたことはすっかり忘れていた。

「小龍、どこを探せばいいと思う？」

相棒に聞いてみる。答えを期待しているわけではない。

「フウ〜？」

「元帥はなにか私に隠しごとをしてる。いい機会だからそれを探し出そう」

沙龍がニヤリ、と笑うと、小龍がヤレヤレ、という顔をした……ように見えた。

「それは賛成なんだけど、その前に本人を探した方がいいと思うね」

そんな声が背後にした。

よく知っている声だ。が、喋り方がまるで違う。

「元帥……じゃないね、あれは……」

沙龍はしよっぱい顔で振り向いて、九雷の姿をしたものを見つめた。

いつもの軍装ではなく、伝統的な漢服を着ている。九雷もたまには漢服を着る

ことはあるが、この姿はおそらく盤古真人のポリシーみたいなものだろう。

そして、『彼』が自由にここを動いているということは、魁星は負けたに違いない。念のために聞いてみた。

「魁星さんはどこ？」

「お花畑でおねんねじゃないかな」

「あなたがやったの？」

「いや、急に倒れちゃったんだよ。まあ、力の使い過ぎだと思うけど……」

「……」

武器はなにも持っていない。が、もともと沙龍は武器に頼ってはいない。

ここで天地開闢をなした怪物と戦闘になったとしても構うもんか、と思っ
た。

「盤古真人、元帥の体を返して」

「いずれ返すよ」

「それが五分後とかなら待ちますけど、一年後だったら待てません」

「うわあ、すごいせつかちだね。一年って！ 百年くらい一瞬じゃない」

「そりやあなたがたの感覚だとそうでしょうけど、人間の寿命は百年もありませんから」

「う〜ん……」

盤古はオーバーに眉間にしわまで寄せて考えている。九雷なら決してしない行動だ。最初に遭遇したときは無性に腹が立ったものだが、例えばこれが双子のお兄さんなら許容はできそうだと沙龍は思った。

「それじゃ、こうしようか」

「なにかいい案でも？」

「君はこの体の主のパートナーでしょう？ 君が彼の子供を産んでくれれば、僕はその子の体を借りることが出来る。よし、レッツ子作り！」

などと、両手を広げてニコニコ笑っている。

「ハア!? なに言ってるんだこの●◆野郎が！」

「あれ？ だめなの？ 君たち夫婦でしょ？ あ、まだ結婚してない？ でも恋人同士だよね？ レス？」

「そうじゃなくて！ 意識が別の人とデキるか！」

「うわゝ、めんどいなゝ。人類みな兄弟じゃないのゝ。そんなちっさいことにこだわってちやだめよゝ？」

どうも、この盤古真人は沙龍と相對するときには魁星の口調になるようだ。

それも相まつてか、沙龍は半ギレした。

「そもそもなんであなたは肉体が必要な？ 魂魄だけでもできることはたくさんあるよ！ 漫才とか！ 映画鑑賞とか！ 偶然復活しちやっただけなのに、いったいナニがしたいっていうの！」

「まあ、確かにこういう状態になったのは偶然なんだけど、前々から野望はあったのよ。今度生まれ変わったら、これしてみようかなゝ、とか。あれしたいなゝ、とか。緑麗ちゃんだつて言つてたじゃない。普通の女の子になつて学校帰りにお茶してみたいわゝ、とか」

「……!?!」

「で、そのあたりの野望の話を魁斗星君にしたら、それはダメですつて反対されちやつて。緑麗ちゃん、君はどう思う？ この星はね、僕たちが手を出さなければまつたく別の歴史をたどつたはずなんだ。だから、僕らにはこの星の行く末に

大きな責任がある。もし間違いがあれば、それは修正しなければならぬんだよ」

「修正……？」

「そう。この星に暮らしている人が生き辛かったり、環境が破壊され続けてたり、政治がうまく機能していないなら、それは修正しないとイケないよね？」

「そういうのは当事者が対応すればいいのでは」

沙龍の言は人間側としては至極もつともだが、神の視点を持っている者に言っても無駄である。

「それを僕らは『自治』という。しかし、『自治』だけではどうにもならないと
きがある。人間が動物の住処を決めるのと同じことだよ。僕らはこの星の方向性を決めなければいけない」

「……」

「でも、その判断は難しいよね。それは『自治』の範囲で認めるべきなのか？
もしそうでないなら、誰のなにを基準に判断すべきなのか？ とても難しい問題
さ。だから、碧霞元君がやっているように、多数決で決めればいいんじゃない

かつて思ったわけだ」

「つまり？ この星だめそうだからやり直したいわ、って百人中、五十一人以上の人が判断したら、あなたは天地開闢をやり直すの？」

「そう。飲み込みが早いね！ さすが緑麗ちゃん」

「アホか！」

沙龍は吐き捨てた。

この始祖はなにを言っているのだろう。

一見、まともそうなことを主張していながら、やはりどこかタガが緩んでい
る。

「一度、天地開闢をしておきながら、またやり直す？ 仮に百人中五十一人の自
暴自棄な奴らが『そうしよう』といっても、私はそんなことさせないよ。冗談
じゃない！」

小龍がパーカーのポケットからするりと抜けだして、

「キュウ！」

沙龍に同意するように鳴く。

「混沌——！」

盤古の虹彩が鈍く光った。

さて、沙龍は盤古真人に喧嘩を売ってしまった。

ここに木佐が居たら涙目で嘆くことだろう。

天地開闢をなした始祖相手になにしでかしてくれんじや、ワレエ！ とは言わないかもしれないが、それに近い叫び声をあげただろう。

しかし、ここでそれをしたのは別の人物だった。

「混沌——！」

目の色が変わった盤古は理性をなくしたように小龍めがけて突進してくる。

（ヤバイ、なんかくる！）

最初に盤古真人に遭遇したときの、西方軍の執務室で食らったあの台風のような奔流を予想したが、予想できたからといって、防ぎようはない。

（ヤバイ、死ぬカモ！）

沙龍はそう思いながらも無意識に印を結んでいた。沙龍が黄龍召喚をする前に

やるこの仕草は「九字を切る」というが、日本で知られている九字護身法とはだいぶ違う。

沙龍のは六甲秘術と呼ばれており、元は道教の呪術のひとつである。

黄龍の桁違いのパワーから自身を守るためにするものだ。

しかし、当然のことながら、いまから召喚して間に合うはずはないし、この夢の世界ではそもそも召喚できないだろう。

(うおおおお、本気でヤバイ！)

そのとき、

「小龍——！」

そう呼んだのは沙龍ではない。

九雷の声に応えて、小龍は小さな緑色の体をピンとのぼし、それは空中で見る間に長い金属に変わった。

(剣になった……!?)

美しい直刃だ。白金のような色をしている。

いつもの軍服を着た九雷がそれをわし掴んで、盤古の頭上に振り下ろした——

ところまでは見えた。

沙龍はその衝撃波になんとか耐えた。

「大丈夫か、沙龍！」

九雷が半分振り返って聞く。

「うん」

「やるだろうとは思ったが、早すぎるぞ！」

九雷は呆れているようだ。

「盤古は？」

敵の姿は霧散したようだが、ふたりとも油断はしていない。

「手ごたえはあった。が……、消えてはいないだろうな」

九雷は直刃の剣を収めて左手に持ち替えた。沙龍を見る。叱責の目だが、安堵の色もあった。

「えっと……」

いつもの九雷だ。濃紺の軍装も、抑えた喋り方も、瞳の冴えた藍色も。

「大丈夫か、沙龍」

同じことを聞くのは九雷の癖である。本人はそれに気づいていないのだろうが、沙龍は自分に対してだけ発揮されるこの過保護さをあまり歓迎していない。

「うん、大丈夫」

やっと深く息をついて、九雷は改めて辺りを見渡した。盤古真人の姿はどこにもない。

「お前はどうかやってここに？ 天真か？」

「そう、いきなり音のするオモチャのハンマーではたかれたよ」

笑って言ってやった。

「外での元帥は眠ってるけど、ここでは『起きてた』の？ この状況はどうなってるの？」

「俺は魁星に起こされたんだ。『夢を見たまま起きろ』とな。難しいことを要求するだろう？」

「ん……？ どういうこと？」

「つまり、俺が夢を見ている間は、盤古をここに封じておくことができるそう
だ。魁星の意識が切れようとな。だから、俺は夢を見たままにして、もう一人の

自分に盤古を討たせることにした。策は色々考えたが――。小龍が来てくれたから、だいぶ勝率が上がった」

「フム。そっか、私に感謝してね」

「大変感謝していますよ、我が婚約者殿」

「ム……」

いつぞやとセリフが逆になっていることに気付いて、沙龍はムツとしたあとに微笑んでいた。

「それで、元帥は分身の技でも使ってるの？」

「正確に言うとは違うんだが、まあ、似たようなもんだな」

「……？」

魁星曰く、夢の世界ではドリームマスターの望みは大抵叶うらしい。が、そのためにはいわゆる「明晰夢」を見なければならぬわけだが、九雷はいま「盤古を討つために自在に夢世界を動き回る自分の夢」を見ているらしいのだ。

「ほえー、そうなんだ。つまり、いま、私の目の前に居るのは、元帥の夢の中の元帥なのね？　なんか不思議。よくそういう都合のいい夢を見れるね？　どうや

るの？ 私にもできる？」

「脳の使い方にコツがあるんだが……。たぶん、お前にはできないだろう」

「なんで」

「いや……」

と、九雷はなぜか笑っている。

「なんかいま『バカにはできない』って言われた気がする」

「いや、そうじゃない。まあ、性格と言っておこう。たとえば、陽輝はできないだろうが、奏欽殿はできそうだ」

「ああ、なんか……分かるような分からんような……」

性格の細やかさの話か、と沙龍は思った。

「で、小龍は『どっち』が本当の姿なの？ 元帥は小龍が化けるって知ってたんだね」

九雷の持つ直刃の剣を見て、言った。景春が持っている大刀よりはひとまわり小さいが、美しい剣だ。

「ずいぶん昔の話だがな、これも話すと長くなる。今度、寝物語に聞かせてや

る」

かつて、玉帝の命で天地開闢の真相を調べていたときのことだ。まだ肩書は少尉だった。

当時、小龍こそが混沌だと突き止めることができたのは、『本人』の告白があつたからだ。緑麗のそばをうろちよろしていた小さな龍が、そう言ったからである。

「姿は変幻自在だそうだ。小さな龍の姿は本人が気に入っているらしい」
九雷は手短にそれだけ教えてくれた。

「さて、じゃあ頼もしい婚約者も合流したことだし」沙龍はダメ元で提案してみる。「盤古対策をしようではありませんか」

「そうだな。早くなんとかしないと、天真に法外な治療費を請求される」

「……」

沙龍はまじまじと九雷を見つめた。

「なんだ？」

「いや、絶対『小龍を置いてお前は帰れ』って言われるだろうと思ってただけ

ど……」

そう言われては苦笑するしかない。

「毎回それをやると嫌われるだけだからな」

「フーン？」

「……というのは建前で、帰る方法はないからな」

「……ハイ？」

「俺が目覚めない限り、部外者は帰れない。盤古を追い出すまでは付き合ってもらうしかない」

「ああ、そういうこと……」

「……というのも建前で」

「……ハイ？」

「盤古に体をのっとられるわ、魁星に夢の邪魔はされるわ、恋人はどこかへ行ってしまおうで、さんざんな日々だったんだ。そばに居てくれ、パオベイ 宝贝（※ダーリンの意）」

九雷は遊んでいるのだ。珍しく口調が芝居がかっている。

「もう！」

『盤古をおびき出してタコ殴りしたあと出て行ってもらおう作戦』（沙龍命名）の会議は、作戦名とは裏腹に繊細なメンタル面から始めることになった。

「さっきの様子からすると、どうも盤古は小龍が嫌いみたいだね。なんかあるのかな。因縁めいたものが」

沙龍が言った。

「因縁か。逆なら分かるんだが。一度勝った相手に執着する理由とは……？」

「うーん……『実は勝ってない』とか？」

「！」

「勝ちを譲られた、みたいな話？ だったら、盤古のほうはプライド傷つけられたーって、こだわっちゃうんでない？」

「そうかもしれん」

「え、思いつきで言ったただけなんだけど」

「いや、思い当たることがある」

あの南方軍の地下実験室を訪ねて、四海の至宝が暴発した直後、九雷はしばらく意識があつたのだ。半分だけ乗っ取られているという状態だったのだろう。

そのときに急いで木佐にメッセージを送つたのだが、盤古真人の意識は明確に『混沌』を探していた。

しかし、盤古には混沌を探し当てることはできない。いまの姿を知らなかったからだ。だから、彼はひとまず黄龍の保持者を探した。その近くに混沌が居るはずだと思つたのだろう。

「たぶん正解だ。それなら、小龍を囮に使つて小龍でトドメを刺せる」

「元帥は結構ひと、いや、龍使い荒いよね……。まあ、小龍はふだん穀潰しだから、今回くらい役立ってもらおうか」

九雷の腰に収まっている剣が、かすかに明滅していた。

了承の意味なのか、文句なのかは分からない。

「それと、さっきあの人は妙なことを言つてたんだよ。『緑麗だつてこう言つていた』みたいなことを。つまり、盤古真人はこの夢世界で緑麗と接触したんじゃない」

ないかな」

「緑麗と？ どういうことだ？」

「いままではつきり言ったことはないんだけど、どうも緑麗はね、私の中で完全には消えていない気がするんだ」

九雷は、以前、沙龍の夢の中で緑麗の意識と会ったことは忘れてる。

だから、緑麗の意識が残ってしまった理由も分からない。

「なぜ分かる？」

「うーん……、ちよつと思ひ当たる程度なんだけど……」

沙龍も魁星に『夢封じ』を仕掛けられたそのときに、夢の中で一度気付いたことがあるのだが、厄介なことに魁星の術は目が覚めるとすべて忘れてしまうのである。

『まさか——、緑麗、貴女は……！ 輪廻のシステムをぶっ壊そうというの？』

しかし、夢世界での出来事を忘れても、沙龍はたびたび白昼夢の中で緑麗とシ

ンクロしている。いままでは、緑麗と自分を別人だとみなしていたので、その白昼夢も映画のワンシーンくらいにしか認識していなかったが、龍王山で小龍を説得する緑麗が自分に重なったことで、なにかが吹っ切れたのだ。

「緑麗はね、本当は輪廻を呪っていた。こんなシステムがあるから自分は苦労する、余計な仕事を増やしやがって、輪廻を否定する仙人たちはまったくもって正しい、って。だから、輪廻を利用して麒麟を討つことにしたけど、裏では碧霞元君と結託して、麒麟を討ったあとはこのシステムを終わらせようとしていたんだよ」

「……」

九雷はそんなことは初めて聞く、という顔をしている。当然だ。緑麗はそれを碧霞元君以外誰にも語ったことはなかったのだ。

「でもね、『私』は後悔したんだ。短い人の生を渡り歩くのは予想に反して楽しかったから。玉帝のかけた『呪』なんて形だけで、『悲劇的な死』はたとえば病死だったり、交通事故だったり、がほとんどだった。それもたいして苦しむこともなかった」

「……」

沙龍はどこで「それ」を知りえたのだろうか。まるで生まれ変わった全ての人生を知っているようではないか。

「……沙龍？」

「うん？」

「なぜ、転生の記憶がないのにそんなことが分かる？」

「自分でもよく分からないんだけど、どうも、この夢世界だと色んなものが接触してくる。なんていうんだらう。碧霞元君が言っていたけど、五行の気脈ってのは、有機とか無機とか、とにかくすべての森羅万象らしい。そういうのが教えてくれる」

「そうか、こういう精神世界だと五行にアクセスしやすいということか」

もともと夢の世界に五行の気脈は存在しないのだが、沙龍自身が五行行使者であり、九雷もまた木行のマイスターである。

そうなれば彼ら自身が水源のような発生源になる。

「シアラン……碧霞元君はね、そういう濃度の濃い世界の中で、ひとり、輪廻の

呪縛に縛られている。私は、勝手にそこから抜け出した以上、彼女を救わなきゃいけない気がするんだ」

「そうか……」

九雷は一度納得しかけたのだが、

「いや、お前の繰り返された輪廻の中で、一度だけ、悲劇的な死があったはずだ。それを、お前は覚えてはいないだろうが……」

そんなことを言い出した。

「……」

「ルーシア・フォン・クリストフの最期を、見に行くか？」

「え……？」

心臓がバクツと音を立てた。

「私が気にしていること、なんで分かったの？」

「……」

九雷は難しい顔をしていたが、

「最初にお前がここに来たとき、つながった夢の断片がそうだ」
「だいぶ間を置いてから教えてくれた。」

「……？ ああ、なんか夜のお城みたいなところ……」

つまりこのドリームマスターは寝ながらにして、自分の夢世界全域を把握しているらしい。

沙龍が最初にあの夢に引っ張られたのは、そういうことなのだろう、と。

「多少脚色されているが、あの夢は大体事実通りの展開になっている。見に行くか？」

硬い表情からはなにも読み取れないが、むしろ彼はそれを望んでいるのではな

いかと沙龍には思えた。

「盤古は？ 大丈夫？」

「いまは近付けないはずだ。それに、近付けば小龍が教えてくれる」
なにか細工をしてあるようだ。九雷ならではの。

「そっか。……じゃあ、見てみる」

沙龍の返事を待って、九雷は空いている右手を宙にかざし、モニターのひとつをふたりの目の前に広げた。

そこに古い映像のように映ったのは昼間の屋内だった。

古めかしいドレスを着た十代後半の女性が窓辺でなにか話している。

(……！)

沙龍はその女性を見たことはない。しかし、誰かはすぐに分かった。

以前、西方魔界のパール・ベリトの家で見たのは赤ん坊のころの写真だけだったが、その赤ん坊が成長した姿である。

緑麗のような誰もが目を見張る美女ではなかったが、淑女然とした落ち着きのある女性だった。

『アルベルト、今日はお時間はよろしいの？』

どこの言葉かは分からなかったが、内容は理解できた。

彼女が話しかけている人物の声や言葉は聞こえない。

『……そう。嬉しいわ。もっと外国のお話を聞かせてくださる？』

上品な仕草と上品な言葉で、沙龍を知る人にはとても信じられないだろうが、沙龍自身はこれが紛れもなく自分なのだと分かる。

生まれと環境で人はこうも変わるといふことか。

「話している相手はアルベルト・ヴァレフスキ。彼女の婚約者で貧乏貴族の三男だ」

九雷が解説してくれた。

「政略結婚なの？」

「そうだ。だが、ルーシア・クリストフのほうは彼を慕っていた」

それはこの映像を見ても分かる。幸せそうに微笑む彼女は、相手のことを完全に信じ切っている様子だ。

「しかし、彼のほうは金目当て……ってことか」

九雷が「貧乏貴族」とわざわざ言った以上、そうなのだろう。

『あのね、アルベルト。今日は早く帰ったほうがいいわ』

長い金髪に緑の瞳のルーシア・フォン・クリストフは外の世界を知らない。

『だって、この空模様ですもの。雨がきそう』

彼女が知っているのは自分の住んでいる城とその周囲だけ。ただ、自分が少し人と違うということだけは知っている。

『え？ そうかしら？ だって雲を見ていれば分かるわ』

その婚約者との逢瀬はだんだん日が開いてくる。

二人の間になにが起こったのかは映像からは分からない。

「アルベルト・ヴァレフスキは女には優しかったが、私生活ではアル中の能無しだった。両親に言われて姫様のご機嫌を取っていただけの男だ」

感情のこもらない声と表情で九雷が言った。

「そして、なにかの歯車が狂って、アルベルトはルーシア・クリストフの寿命が終わる前に酒場での喧嘩で刺されて死んでしまう」

「……あれ？」

という沙龍の疑問に、九雷は頷いていた。

「しかし、天界側の執行官が書いた筋書きでは痴話げんかの末にルーシア・クリストフを殺すのはアルベルトのはずだった」

映像ではルーシアが窓辺でため息をついている。

足が遠のいてしまった恋人を想っているのだろう。

「天界側が直接手を出すのはご法度だ。もしそういう不慮の事態が起こったときは別の筋書きを考えて実行しなければならない。しかし、焦った執行官は自らルーシア・クリストフを手にかかけようとした」

「え……」

「そして、実際、ルーシア・クリストフは凶刃に倒れた。俺が駆け付けたときは間に合わなかった。彼女は……」

ちやうど、映像はその場面になっていた。

鷲鼻の中年男が彼女の首のあたりを刺して、自分も呆然としているところだった。

駆け付けた視点の人物が、まずその男を見て、近付き、男は崩れ落ちる。

そして、『彼』はうつろな目をしたルーシア・クリストフを抱きかかえた。喉の下に致命的な傷がある。これは助からない傷だ。こと切れるまで苦しむだけの傷――。

彼女は『彼』を認識する。しかし、喉がつぶれて声は出せない。ただ『彼』が持つナイフを凍り付いた目で見ていただけだった。

「……」

そういうことか、と沙龍は悟った。

「俺がアルベルト・ヴァレフスキに似ていたんだ。いや、自惚れで言うならルーシア・クリストフが、無意識に俺に似た男を愛したただけなのかもしれない。いずれにしても、彼女は誤解したまま死んでいった。弁解する気はないが――」
「ううん、分かるよ。元帥は彼女の苦しみを終わらせたかったんだね……」

沙龍は九雷を疑ったことを後悔していた。

最愛の恋人を信じきれなかった。そして、そんな逼迫ひっぱくした事態を想像する力もなかった。

しかし。

九雷の普段の行いと、自分の残念な想像力を考えれば、これは仕方ないんじゃないか？ と、考えるのが沙龍である。

そういう大雑把な性格が分かっているからこそ、さきほど九雷も「そういう（繊細な）脳の使い方はできない」と言ったのだろう。

「ルーシア・クリストフのときだけシナリオが狂った原因はあとになって知った。ルーシアが両親のほうと契約をしていたんだ。そのあたりのことはお前も知っているだろう」

「うん。ルーシアはルーシア・クリストフが緑麗の生まれ変わりだって知ってたよ。もしかして、あの人は元帥に嫌がらせがしたかったの？」

「そうかもしれん」

「ハア……」

と、わざとらしくため息をつく。

ルーシアの九雷への関心は、沙龍にもよく分からないのだ。過去になにかあったのだろうか、あれは、九雷が好きすぎて構ってちゃんになる魁星とも、九雷へのひねくれた憧憬を持つ敖丁とも違う。かといって純粹(?)な憎悪かとい

うとそれも違うように思う。

「で、質問ばっかで恐縮なんだけど、もういつこだけ聞いていい？ 元帥はなんでルーシア・クリストフのときに現場に居たの？ もしかして、上海でも私と会ってない？」

「……」

九雷が、そこは聞かれなくなかった、という顔をしたので、沙龍は「これはぜひ問い詰めなければ」と思った。

「ねえ、なんで？」

と、わざと無邪気に聞くので、九雷も観念した。

「その二人だけじゃない。俺は何度もお前の様子を見に行った。転生するたびに何度もな」

「……」

「……」

「ストーリーカー？」

「……」

やっとな分かった。

九雷がずっとルーシア・フォン・クリストフの件を隠していた理由。

それはこんな風に「それ、単なるストーリーカーじゃん！」と言われるのが嫌だったからだろう。普段、クールな仮面をかぶっている男なら尚更だ。

「さて、では当面の問題がクリアになったところで、作戦会議を続行する」

九雷の立ち直りは見事だったが、沙龍はまだニヤニヤしていた。

「ハイ、せんせい」

盤古真人はまだ『魂魄状態』なのである。基本的には冥府で遭遇するあの光の球と同じだ。だから、九雷の現実の肉体が睡眠中である以上、盤古に物理的な力は一切ない。……と、説明された。

「じゃあ、そんなに恐れなくていいってことよね？」

九雷の手元をのぞき込みながら沙龍が言った。

小さな携帯端末の画面には数字の羅列があるだけで、沙龍にはさっぱり分からない。

「しかし、攻撃を受けたとして、感じる痛みは同じだぞ。現実の肉体が傷つかな

い、というだけで」

「うーん……それは嫌かな」

「それに、この夢世界で深刻な精神ダメージを受ければ、現実世界で廃人になる可能性もある」

「うーん……それも嫌かな」

「よし、終わった」

九雷が最後のキーを押すと、端末の画面がOKサインを表示した。

周囲に漂うモニター群も次々に起動していく。

「……？」

「盤古を誘い込む罫を張った。奴は魂魄状態だから歩ける場所が限られているんだ。その性質を利用すればおびきだすのはたやすい」

「そうなんだ」

魂魄には五感がない。ではどうやって動くのかというと、魂魄の好む光の強さや音、または温度というものがあるらしい。魂魄はそういったものを目指して漂うように動く性質があるのだ、と。冥府はその計算ずくで設計されている。

「魂魄用の道を作った。盤古は確かにその道しか通っていない」
九雷はひとつのモニターに地図を呼び出す。

いじわるなほどに複雑な迷路だ。

「最終ゴールはこの印の部分？」

中央の赤い印を指す。

「そうだ、ここに誘い込む」

「なにがあるの？」

「なにもない。盤古がこの地点に到達した時点で俺が『目覚める』ようになって
いる」

「えーと？ そうしたらまた盤古さんが元帥の体で目覚めちゃうのでは？」

「そうさせないための小龍さ」

「???? 私はどうすればいい？」

「特になにもしなくていい」

「やっぱりそういうポジションなの？」

もう諦めた風に言った。

「暇なら、向こうの裏庭で魁星が寝ているから、叩き起こしておいてくれ。俺が目覚めればどうせ奴も起きるだろうがな」

「裏庭……？ うん、分かった」

そういえば盤古も「お花畑」と言っていた。

九雷の言う方向に行ってみると、大きめのモニターがあった。その中を覗きこんでみると、

「あ……」

首が向こう側に突き抜けたのだが、そんなことよりも沙龍のよく知る風景がそこにあっただので、そのことに驚いた。

一面の黄色い花と、水色の空――。

ここは、九雷の職場である天界軍司令本部の裏庭にあたる場所で、金盞花が一面に植えられている。花を植えたのは九雷本人だという。

（元帥の夢の中にもこの風景があるってことは……）

彼にとってもここは大切な場所なのだろうか。

そうだといいな、と沙龍は思った。

この風景には、胸がしめつけられる。

五年前、ここで一世一代の選択をした。

いや、沙龍にとつては「選ぶ」余地などなかっただろう。

九雷はこの黄色い花畑の中で「自分の住む世界を選べ」と言った。

答えは決まっている。沙龍は全てを捨ててでも九雷と一緒に居るつもりだった。

(まあ、いまんどこ後悔はしてないよ)

誰かに対して、そんな独白をしたくなかった。

誰だろう。神谷百合子だろうか。

うん、そんな気がする。

彼女とはもつと話したかった。

ねえ、お母さん。

じーちゃんとは仲良くやってたの？

そういえば、お祖母ちゃんはどんな人だった？

子供の頃はなににして遊んだりしてたの？

お父さんはどんな人だった？

お父さんって二百年くらいひとり生きてきたんでしょ？

寂しくなかったのかな？

ねえ、お母さんは幸せだった？

龍王に仕えて、人として生まれて、誰かのために生きて――。

幸せだった？

「……」

しばらく歩き回っていると、黄色い花に埋もれて寝ている魁星を見つけた。

こっちの魁星は外で見たほどミイラになってはいない。

「ちよっと、魁星さん、寝てないで、起きて」

ぺちぺちと頬を叩いてみたが反応はないので、さらに強く叩いてみると、

「い、痛い……」

やっと起きた。

「気分はどう？ そろそろクライマックスだよ」

「あれ？ 緑麗ちゃん？」

魁星はあたりを見回して、立ち上がった。

「盤古真人は？」

「いま、元帥がおびき出ししてるところ。んで、そのまま排出するつもりらしい」

「そっか。結局、九雷頼みになっちゃったね」

「ねえ、魁星さん。盤古と喋った？ 緑麗が来てたみたいなんだけど、盤古になんの用だったんだろう？ 知ってる？」

「ああ、前の緑麗ちゃんね。うん、うまく聞きだしたよ」

「ホホウ、さすが口八丁の男」

「いやあ、照れるなく、そこまで褒められると」

「いや、あんま褒めてない」

シユン、となった魁星は、それでも教えてくれた。

「『早く出ていけ』って、言いに来ただけみたい」

「は？」

「なんかね、これは前に聞いたことだけど、緑麗ちゃんは『誰かとの約束を最後まで見守る』という使命があるんだって。その使命感から意識だけ残っちゃった

らしいよ。でも、自分は何にも生まないし、なんの影響力も持たない、って言うてた。ただ、見守るだけ。だから、厄介な盤古が現れて、なんとかしようにも自分は何にもできないから、ただ『早く出ていけこのヤロー』って言いに来たんだったさ」

「はあ……」

緑麗は確かにそういう人だったかもしれない、と沙龍は思った。

「来たか——」

熱風のようなあおりを食らって、九雷は身構えた。

五行行使者だったという盤古とまともに五行術でやり合っても勝てないが、こちらに有利な条件はそろっている。

まず、敵が魂魄状態であること（これは魁星のお手柄である）、四分の一は別の始祖の魂魄であること（敖閏がニセモノの至宝を渡したおかげで）、能力には制限がかけられていること（これは敖丁の功だ）、そして、こちらには小龍が居

ること（言わずもがな沙龍のおかげである）――。

これだけでも十分だが、さらに、九雷にはもう一つ勝算があった。

（あとは真武君がなんとかしてくれるだろう）

自分でも不思議だった。ここまで掛け値なしに信頼できるのは陽輝以来だ。いつの間にか、自分の中では木佐がそういうポジションになっていた。

「混沌んんん――っ！」

明らかに常軌を逸した盤古真人が、九雷めがけて、いや、小龍めがけて突進してきた。

ところどころ、姿は溶けて綻びたようになっていく。魂魄状態が長引いているので、たもてなくなっているのだろう。

「小龍、いくぞ」

剣を水平に掲げた九雷が言うと、刀身が白く光って、今度は弓矢に形を変えた。た。

そして、その矢が灰色の虚空めがけて放たれたのだ。

夕方も過ぎた時間帯である。

ホークス君に乗った木佐が降り立ったのは、火雲宮北東エリアの広場で、そこでは、ぼさぼさ頭の公務員がコーヒーを飲んでくつろいでいた。というより、仕事をさぼって外の風にあたっていた、と言ったほうがいいかもしれない。

(あれ?)

と、当然、公務員は霊獣と騎乗していた人物のミスマッチに気付く。

(なんで玄武佑君が碧霞元君の霊獣に乗ってんだ?)

木佐は公務員に気付いて、片手を上げて挨拶していったが、忙しそうに建物の奥に消えた。

「……」

と、思いきや、木佐はすぐ引き返してきた。

そして、

「さぼりか？」

いきなり公務員にそう聞く。歳は公務員のほうがいくつか上なのだが、この四方将神はなぜか最初に会ったときから同級生のような態度である。

初対面の人間には一応敬語で接する木佐にしては珍しいのだが、つまり、『沙龍の親しい人』扱いなのだろう。友達の友達、という感覚である。

「いや、まあ、なんつうか……」

「さぼってるんだったら、手伝ってくれ」

「なにを？」

「色々」

「いや、もうちよい具体的に……」

そう言ったのだが、木佐は有無を言わず「着いてこい」という仕草をして、振り返りもせずに進んでいく。

(……ま、いつか)

あのキレイな四方将神に恩を売っておくのは悪くない、と公務員は思った。冷めたコーヒーを飲み干してから、木佐の後を追いかける。

サプライズパーティーの飾りつけ仕事でないなら、自分に要求されるのは銃が必要となるような、サクッと終わる案件のはずだ。一、二時間なら大丈夫だろう。

泰山府、長官室である。

(こりや驚いた)

公務員は初めて自分の所属組織の長に直面して、こんな普通の爺さんだったのか、と思った。

どちらかといえば端整な顔だし、シックな黒い漢服もスマートだ。

噂からすると、もっと奇天烈で変人で思わず逃げ出したくなるような妖怪を想像していたのだが。

「また九雷は難しいことを要求するのう……」

泰山府君が椅子に沈み込んで唸っている。

「魂魄を捕獲するのはそんなに難しいんですか？」

木佐が聞いた。

「これが冥府内で、普通の魂魄なら大して難しくはないが、通常空間で、さらに始祖の魂魄とくれば、難易度は跳ね上がる。まあ、できなくはないだろうが：

…」

「できるのなら、やるしかありませんね。九雷元帥は、盤古の魂魄は雷城から正確に南東方向に射出する、と言っています。時間は夜のほうが見やすいとの判断で二〇時ジャスト」

そのメッセージはつい先ほど入った。

てつきり九雷が覚醒したのだと思い、雷城に連絡を入れたが、天真の答えは「まだ睡眠中」とのこと。

九雷がどうやって寝ながらメッセージを送ってこれたのかは不明だが、なにか向こうの状況が変わったのだろう。

「ム、あと一時間もないな。まあ、やってみるかのう。とりあえず、役に立ちそうなのは全部持っていくか。ホークス君、手伝え」

「くっ」

ガラクタを選別する泰山府君とホークス君の背後で、公務員は、

「つまり？ 死神総出で厄介な魂魄を回収しろってこと？」

木佐にざっくりと聞いた。

が、答えたのは泰山府君である。

「時間的に総出は無理じゃ。なのでいま手の空いてる者だけで当たってもらおう。

お主、所属は？ ああ、栄吉の部下か。なら、魂魄回収はできるな？」

「ええと……」

できなくはないが、限りなく遠慮したい。

が、それは許されない宮仕えである。

木佐に会ったのが運の尽きだった、と公務員は急いで恋人にメールを送る羽目になった。

『リンリン（注1）、すまん、どうやら今日はそちらには行けそうにない。これから、大昔に地球の大地を作ったとかいう伝説の神様と戦争らしい。冗談だと思っただろうが、まるつきり真実だ。なんだったら動画を送ってもいい。ただ、俺が生きてられたら話なんだが——』

泰山府の本部建物は巨大な洞窟を利用して作られているので、普通の省庁ならば玄関ホールに値するところはポツカリとした天井の高い空間になっている。

そこを横切る長官御一行——泰山府君、木佐、ホークス君、そして公務員——は、少々『異種格闘技大会参加メンバー』のような雰囲気醸し出していたが、そこへ、さらにハチャメチャな面子四名が降り注いできたので、大パニックになったのは言うまでもない。

「どわーっ、どいて、どいて、どいてーっ！」

「偃月君!？」

木佐の頭上に偃月が降り注ぎ、

「こんな高いところから落下するなんて聞いてないよー！」

「おっ、お嬢——っ!？」

ホークス君は自ら碧霞元君の下敷きになった。

「おや、これは失礼——」

「お主、なにをしておるのじゃ……」

敖閏は泰山府君を押しつぶしている。

景春だけはさすがに受け身を取って無難に着地していた。見上げると、五メートルほど上空にドアだけが平面下向きに浮いている。あそこから落ちてきたのだ。

「まったく、どうなってるんだ、ドアの位置とか向きは調整できないのか」

「敖閏殿に、東方軍大将まで。いったいどうしたんじや」

泰山府君がそう言って、

「ここは、泰山府本部……？」

碧霞元君がそう言ったとき、ハッ、とその場に居た者、ほぼ全員が固まった。固まっていないのは偃月くらいだ。

（泰山府君——！）

（霞藍か！）

ふたりの視線がバツチリ合ってしまった。

何百年ぶりだろうか。

前に鉢合わせしたときは、火雲宮で一番背の高い塔が欠けて、建て直す羽目になつたものだ。

碧霞元君は即座に扇子を取り出して、なにかを発動しようとしたが、

「やめておけ」

景春に手首ごと掴まれて阻止されてしまった。

「……!？」

木佐と公務員は立場上、泰山府君を守るように動いたが、老人はうつつとうしそ
うにその二人を払って解散させた。「やらせておけ、ワシは負けん」という態度
だ。

「時間がない。いまは盤古の魂魄を回収するのが先だ。そのあとなら、いくらで
も喧嘩は買ってやる、碧霞元君よ」

泰山府君がすくつと立って言い渡す。

小柄な碧霞元君にとって、大柄なこの父親に前に立たれるだけでも、「ムカつ
く！」となるわけだ。

「……」

碧霞元君は答えなかったが、扇子を納めたので一応は了承した、ということだろう。

それを見て、景春も次の行動に移ることにした。

「回収？ 盤古はどうなってるんだ？」

「四十五分後に雷城から射出予定、だそうです。我々はその魂魄を回収しに行く途中です。九雷元帥はまだ動けません。恐らく馨も」

木佐が言って、その回収方法などを手短かに説明した。

「そうか。しかし、あんな厄介なのを回収できるのか？ 爆破でもして粉みじんにしてしまったほうがよくないか？」

「粉々に砕いたとて、同じよ。魂は全て冥府に還り、循環する」

泰山府君が早足で歩きながら言う。

景春はその後ろに影のように付き従う公務員をチラッと見て、極東の一件で同道した男か、と思い出していた。

「碧霞チャン、どうするの？」

一行を見送る姿勢で動かない碧霞元君に敖閏が聞いた。なぜか、偃月も残って

いる。

碧霞元君はホークス君の首をなでながら、

「どうしよつか……。ホークス君」

「みなさんと一緒に行かないんで？」

盤古の復活に関しては、自分にも責任の一端があるのだ。

その尻ぬぐいを他人任せにするのはプライドが許さない。まして、その陣頭指揮を執っているのがあの泰山府君なら尚更だ。

しかし、一緒に行動するのは遠慮したい。あの顔を視界に入れたくはない。

「敖閏様は？」

どうするの？ と聞いている。

「盤古真人の件には僕もちよつと関係してるからねえ。まあ、見物がてら見に行こうか？」

「偃月は？」

そう聞く碧霞元君は、少々不思議なものを見るような目をしている。

どうも、彼は敖閏のようなフェミニズムで行動しているわけではなさそうだ、

と。

「そうだなあ。面白そうだから行こっか」

ニカツと笑っている。

「まったく、この人たちは……」

確かに敖閏が言っていたことは正しいのかもしれない。

第三者は居るだけでありがたいことがある。

しかし、自分を置いてサクサクと木佐についていった景春にはちよつと腹立たしいものを感じた。

「お嬢、遅くなりやしたが、お帰りなせい！　日本はどうでした？」

ホークス君はいつもの通りである。

「そうだね、楽しかったよ。お刺身とか美味しかった。今度、落ち着いたら、巽凜と磯釣りに行こうか」

「いいっすねえ！」

お嬢がこんなことを言い出したのは何百年ぶりだろう、とホークス君は思った。

(注1) ……シリーズ未登場の公務員の恋人の愛称。沙龍は巽凜のことを同じく「リンリン」と呼んでいるが、巽凜のことではない。

火雲宮から朱雀門を通って城下町側に抜けると、すぐに玉清境の入口が見える。距離は百メートルもない。雷城の瑠璃色の屋根群も朱雀門から見える。

木佐の感覚で言えば、江戸城の桜田門から出て、井伊家の屋敷（※いまの警視庁の西隣）に行くようなものである。

「魂魄が光るのは、その人が現世で燃やした命の灯が、まだ残っているからなんだよ」

ホークス君に乗る碧霞元君が言った。

後ろには偃月が居る。二人乗りしているのだ。

その隣で敖閏は白い獅子、さんげい狻猊に騎乗していた。これもりゆうせいきゆうし竜生九子の一匹である。

「だから、早死にした人ほど強く光るといふね」

敖閏はそれを泰山府君から聞いた。

「へえ……。じゃあ寿命をまっとうした人はあんまり光らないのか」
偃月がそう聞いた。

「そう。逆みたいでしょ。だから、輝いている魂魄ほど、前世への未練があつたり、来世への野望があつたりする人」

「なるほど……」

夜空にくっきりと現れた光の軌跡が、『それ』を物語っていた。

「あれか——」

盤古真人の魂魄が雷城の屋根付近から飛び出してきた。

それに先んじて一本の矢が射出されたのだが、ここからはよく見えなかった。近くに居る木佐たちには見えただろうか。

三十名ほどの即席の魂魄回収部隊は地上に展開している。

雷城の南東のエリアを三つに分け、それぞれA地点、B地点、C地点とし、最大一キロ先までカバーしていた。

その一キロ先のC地点には広い公園がある。景春はそこに居た。

泰山府君は木佐と共に空から指示を出している。垂直離着陸のできる小型飛行機に乗っているのだ。崑崙の黄巾力士よりも小回りがきく。

「来た……!?!」

コ・パイシートに座る木佐が言った。

ほぼ四十五度の角度で地上から空を突き刺すものがある。

モニターが捉えたのは小さな棒のようなものだ。

「弓矢か……!?!」

そして、さらにその矢を追いかける形で、白い光が地上から空に昇った……ように見えた。

操縦席の泰山府君が、

「盤古、確認。C-01、地上から視認できるか？」

地上に呼びかける。

『こちらC-01、見えます。この射角だとほぼ動かずに済みますね。あの人は夢の中にコンピューターでも持ち込んでいるのか』

双眼鏡と裸眼で両方確認した景春は、呆れたように賞賛していた。

おそらく、九雷は周囲に被害の出ない場所を選んで、盤古をそこに誘導したのだ。

「いったいどうやって夢の中から真武君に連絡して、どうやって盤古の魂魄だけを正確な方向に排出したんだ？」

景春が言うと、

「小龍だよ」

敖丁が答えた。

さきほど、骨折した腕をつるし、点滴まで引きずった状態でC地点に現れたのだが、ここを突き止めたのは大したもんだ、と景春は思った。泰山府本部の会話を傍受していたのだろうか。

敖丁はここに来たことについては特になにも説明しなかったが、立場上、やはり見届けるつもりなのだろう。

「小龍が居れば簡単に圏外を圏内に変えられる。夢の中での行動は……、たぶん明晰夢を使ったんだらうけど、結構、無理してるね。夢から覚めて即入院ってこ

とにならなきやいいけど」

「そうか……。なら、尚更ここで仕留めないと」

「来るよ——」

通常なら鳴らないキュルキュルとした音を立てて飛んできた矢が、敖丁の目の前、五メートルほどの地面に突き刺さった。

それを追いかけてきた『なにか』は、もはや人の姿をしていない。光のアメーバーといった感じのものだ。

そのアメーバーの触手が触れる前に、景春は矢を地面から抜き去り、宙に軽く放り投げて、

「小龍——」

呼びかけると、小龍は今度は黒いボールのようなものに変じた。

五十センチほどの大きさで、そこだけ重力が違うようだ。

「バンコちゃん、ぼくはきみと戦うつもりはないよ。前にもそう言ったよ」

どこから喋っているのかは分からないが、小龍のその『声』は景春にも敖丁にも聞き取れた。

直後、重力ホールに飲み込まれた光のアメーバーはしばらく暴れているようだったが、やがておとなしくなった。

「バンコちゃん、大丈夫。きみが心配しなくても、神も仙人も人も、ちゃんと幸せになれる方法を知っている。ただ、たまに不器用な人たちが居るだけ」

小龍が銀色のスキットルに形を変えて、ポトリ、と地面に落ちた。その中に盤古を封じているのだろう。

「不器用、か。そうだな……」

景春は小さく呟きながらスキットルを拾い上げた。

自分も紛れもなく不器用なひとりだろう、と思う。

「あれ？ 終わったのか？」

陽輝がいつもの革ジャンにアーマライトを肩に担いで現れたが、もう片方の肩には瀕死の敖丁が抱えられている。やはりこの状態での外出は無謀だったようだ。

目は一応開いているが、虚ろに明後日のほうを見ているので、陽輝に支えられているという自覚はないだろう。

「遅刻だぞ」

景春はそう言ったが、すぐに「帰れ」と手ぶりを見せた。

「まあ、出席は取っておいてくれや」

陽輝もさっさと背を向ける。

「こちらC-01、回収作業、終了しました」

陽輝は市内の病院に敖丁を放り込んで帰ろうとしたのだが、話すことがある、
と言われて、しぶしぶ付き合うことにした。

「なんだ？ 珍しい」

「昔の緑麗のとき。どこまで知ってんの？」

ベッドに寝かされた敖丁はまだ青い顔をしている。

「整形の話か？」

「それに関するところでもあるけど……、やっぱり知らないんだね」

先代の西海龍王の依頼で、敖明が幼い緑麗を整形したことは陽輝も知ってい

る。が、その話には続きがあるのだ。

敖丁はぼそぼそ喋りだした。

龍王家の遺伝子を組み込まれた緑麗は、その後も南方軍の研究施設ラボに定期検診と「メンテナンス」のために通うことになった。

その頃の敖丁少年が見かけた緑麗はいつも無表情だった。お化け屋敷に佇む人形のように暗いその顔は、ひどく不細工に見えたものだ。いったいどこが絶世の美女なのだろう、と敖丁はずっと思っていた。

「先代（※敖明のこと）はね、龍族の遺伝子を組み込んだクローン人形を何体も作って実験に明け暮れてたよ。僕には狂気にしか見えなかったけど、誰もあれを止めることはできなかった。玉帝の容認もあつたからね」

その集大成が緑麗なのだという。敖明にとって、緑麗は『作品』だったのだ。「東方天界に突如として現れた黄龍を見たとき、あの人は最初はこう思ったのさ。」

あの神獣を利用してやろう、って。

龍は龍を喚ぶ——。

『霸王』を飲んで龍族の起源を知っていたあの人は、黄龍を『使役できる者』を作って、龍族の星を取り戻そう、とひそかに画策した。しかし、未知数の賭けに身内を使うわけにはいかない。そうだ、龍族の遺伝子を持つ都合のいい実験体が居るじゃないか——。そういうことさ。

つまり、緑麗が最初の『黄龍の保持者』になったのは事故じゃない。緑麗は事故だと思っていたかもしれないけど……」

敖丁はその先代が犯した罪を、やはりどこかで自分も負っているのだ。

その罪の吐露を、一番仲の悪い陽輝にしようと思った心情は、自分でも分からない。意識が朦朧としている末の、自棄だと思いたかったが、おそらく違うだろう。

「しかし、先代の目論見に反して、黄龍の力は桁違いだったし、緑麗は成人してラボから距離を置くようになった」

敖明は原理主義の東王夫に本質的な部分で共感していたわけではないのだ。

もっと単純な話で、敖明は思い通りにならない力とその宿主は要らない、という理屈で動いていたのだろう。

「緑麗にとってはいいい迷惑だろうさ。まあ、いまの彼女は楽しそうだからいいんだけどね」

陽輝は話を聞いている最中、特になにも言わなかったが、

「そうだな」

と、最後の言葉にだけ同意していた。

「ところで、親父さんの件はどうするんだ？」

「さあ、どうしようね。もうあの人も緑麗をどうこうする気力はないんじゃないかな」

敖明はまだ勾留されているらしい。上が龍王家に付度する様子はなかった。

「そうなのか？」

「朱子から聞いたよ。緑麗があの人を下した一部始終。もう完全にへし折ったみたいだね」

敖丁にしてみれば、自分が血縁の甘さで出来なかったことを、沙龍にしてやられた気分なのだが、不思議と嫌悪感はなかった。

むしろ、少しホツとしている自分が居る。

「まあ、プライドをズタズタにされた老人が、再起をはかるつもりなら、今度こそ僕がどうにかするよ。たぶん、ないと思うけど」

陽輝が敖丁の入院手続きをしていたところ、同じロビーで沙龍が同じようなことをしていた。九雷の目は覚めたものの、だいぶ衰弱しているし、天真もそろそろ解放しなければいけないので、入院させるつもりらしい。

「あらー、元西方軍大将で、現大将でもある陽輝さんじゃありませんかー」

沙龍は満面、凶悪な笑顔で、缶コーヒーをグリグリと陽輝の胸に押し付ける。

「痛い痛い痛い、ヤメロ。肋骨折れてんだぞ。いや、俺が悪いのは分かってるが、すまん、迷惑かけた。だからヤメロって——」

「ところで、こんなところで油売ってていいの？ さっき、飛龍が来て、欽ちゃんそろそろ産まれそうって言ってたよ？」

「えっ!？」

盤古の魂魄を回収した景春は軍用車に乗り込む前に、車の進路をふさいでいる
霊獣に気付いた。

隣には碧霞元君が立っている。

「うまくいったの？」

「ああ、あっけなくな」

と、景春はスキットルを見せた。

見慣れていないと分からないが、あれは緑麗が持っていたものだ、と碧霞元君
は気付いた。お酒を入れて携帯するものである。山男がよく持っている。

「そう、よかった……」

あとはもう軍部に任せよう、と思った。自分が見届けるのはここまででいい。

「じゃあ、私は天空山に帰るから」

「……？ いいのか？」

景春は思わずそう聞いてしまった。

このまま大人しく帰ってくれるのなら万々歳のはずだ。

しかし、そう聞いた景春も、聞かれた碧霞元君も、省略された言葉の中身は分かっている。

泰山府君と決着をつけなくていいのか？ 景春はそれを聞いているのだ。

「私がやろうとしても、あなたはまた止めるんでしょう？」

「そうだな。それが俺の仕事だ」

「……」

碧霞元君はしばらく考えて、

「仕事じゃなければ止めない？」

そう聞いた。

「なんだった？」

「……」

なぜこの人はいちいち聞き返すのか。聞こえなかったわけでもないだろうに。

そんなに変な質問をした？ と、碧霞元君は苛立った。

「たとえば、あなたが普通の会社員だったら、止めない？」

「……」

景春は考え込んでしまった。

碧霞元君の意図が分からない。お前が邪魔するならば、自分の権限でイエスマンの大将に挿げ替えてやるぞ、とでも言いたいのだろうか。

朱雀門前では泰山府君が木佐と共に、即席の魂魄回収部隊の戻りを待っていた。

「無事回収した」という一報は入ったので、半数くらい戻って来たスタッフたちは、じゃあもう飲みに行こうか、という雰囲気である。

そこに現れた沙龍は通りがかっただけであるが、一応、九雷の容態などを報告しておいた。

「泰山府君先生、無防備に地上をうろろろしていると、シアランに殺られるよ」
沙龍は冗談めかしているが、この親子間の殺伐とした関係を知っているので、

言ってやった。

「ウム、さつきも出くわしたわい」

「そもその原因はなんなの？」

「まあ、ワシが妻を放置したからじゃろう」

「お母さんか……。それは一番、恨みが深いね」

沙龍がチラッと木佐を見ると、その視線の意味を理解したらしい木佐が苦笑しつつ、向こうに行ってしまった。

「特別措置でなんとかならないの？ お母さんは転生してるんでしょ？」

沙龍は、碧霞元君の母親が廃棄工場行きを望んだことも、それが叶わなかったことも知らないの、なにも考えずにそう言った。

「おそろくな」

「その転生した人にシアランを諭してもらうとか、できないの？」

「それがのう、魂魄の転生先は、基本的には追跡できないようになっておるのじゃ。でなければ輪廻の意味がないじゃろう。ただ、普通に転生した場合は、

まあ、お主の言うような特別措置もできなくはないが……」

「シアランのお母さんは普通の場合じゃなかったの？」

「うむ。アレは完全廃棄を望んでおった。しかし、廃棄は実質不可能で、諦めて転生してもらうしかない。その代わりに、廃棄を望んだ魂魄に関しては、誰に転生したか分からぬようにしたのじゃ。魂魄の色も変えてな」

「そうなんだ」

「だから、アレの転生先はわしでさえも分からん」

「そっか……」

「『あの世』でいう、アレの魂魄に、ワシは一応聞いたのじゃ。来世はどう生きたいかということを」

「へえ、ちゃんと閻魔大王っぽい仕事もしてるんだ」

「で、アレは妙なことを言っておってな」

「妙なこと？」

「ウム。もう搾取されるだけの女などまっぴらだ、と。愛想をふりまいて、媚びを売らなければ生きていけない女などなるもんじゃない、と言って、来世があるのなら、今度は、自分も腕一本で生きていけるくらいの強い男になりたいと

言っておった。上流階級の醜い部分にもうんざりしておったから、次は庶民がい、とも言っていたな」

「へえ……。そういう願いつてちゃんと叶うもんなの？」

「まあ、よっぽど無茶でない限り、大抵は叶う。嬢ちゃんも叶ってるじやろうが」

「え？ 私？」

「ウム、ワシは緑麗にもちゃんと聞いた。お主は『もう美人だ美人だ言われるのはハイパーうんざりなので、くれぐれも普通の容姿にしてくれ』と言っておったわい。ちゃんと叶ってるじやろうが」

「そうだね」

思わず笑った。別に美人に生まれたかかったと思っただことはないが、なんて贅沢な望みだろう、と。

「そっか。じゃあ、シアランのお母さんは……」

ん？ と沙龍は思った。

愛想のない軍人にでもなったかな、と言おうとして、いや、まさかね？ と

思つたのだ。

「正直言つて分からない。が、例えば、自分の腕に覚えがあつたとして、あんたみたいな弱い女性が父殺しをしようってんなら、通りすがりだろうと止めるだろうな」

景春は真摯にそう言つたのだ。

碧霞元君は笑つた。

それが聞きたかつたわけではないのだが、嘘いつわりのない返答を聞いて脱力してしまつた。ここまで表と裏が一致しているのも珍しい。

「少しは腹芸覚えたら？ あと、少しは『か弱い女の子』の扱ひも覚えたらほうがいいかもね。偃月を見習つて」

「愛想をふりまくようにはできてないんでな」

「……そう」

じゃあね、と帰ろうとするので、景春は慌てて呼び止めた。

「碧霞元君——」

「呼びにくそうだね。シアランでいいよ」

それを聞いたホークス君がのけぞったのは言うまでもない。

「シアラン、本当にいいのか？」

「なにが？」

「……」

父親の件だ、とは言わなかった。

「私も本当のところはよく分からない。でも、こんな転生のシステムを作った馬鹿を憎み続けるのはしんどいから、少しでも希望を探したかっただけかもしれない」

「希望は……あったのか？」

「……うん。たぶん」

「そうか」

碧霞元君はホークス君に乗り込む。

それを見て、景春は急に名残惜しくなった。

「天空山に引きこもって、また誰にも会わない生活を繰り返すのか？」

「そうだね、たぶん」

「不健康だぞ。あんたに会いたい男はどうすればいい」

ホークス君は心配そうな目で二人を交互に見ていた。

「会いに来てくれればいい。天空山は貴方を拒みはしない」

以前、碧霞元君は「念のために三回聞く」と言っていたが、三回目は沙龍が機会を作った。

黒焰虎に乗って天空山を訪れた沙龍は、かなりとんでもないことを言い出したのだ。

自分が起業するから一緒に仕事をしよう、と。

「だからね、こんな不便なところで、人づきあいすら満足にできない仕事なんかやめちゃえばいいの。後任が居ないなんて、知ったことじゃないじゃん。そんなのは一番偉い人が頭悩ませればいい話なんだから」

「……」

「私もさう、だいぶ無職ライフを楽しんではきたんだけど、そろそろ仕事しようかなーとか思ってた。

でも、私ができる仕事って結構ないんだよね。

そこで、人界に居たときにやってた仕事をしよつかなーって思ってた。それならノウハウもなんとなく分かるし。

あ、官ではなく民になっちゃうけど、いいよね？ キサさんは四神府の仕事があるから、もう頼れないけど、色々教えてくれると思う」
つまり、興信所を作ろうということらしい。

帝都には確かにそういう『民』の仕事はない。

「あ、それと、この前聞いてきたことだけど、私は生まれ変わってよかったと思ってるよ。キサさんに会えたしね。それが一番大きいよ。

いや、そりゃ、元帥に会えたのもあるけどさ。

だって、恋は終わっちゃうかもだけど、友情は終わらないじゃん。

そうそう、キサさんのことを言う人がよく居るんだけど、昔は緑麗と真武君はあんなに仲良くなかった、とか。

それって、全てが前世の因縁に起因しているわけじゃないっていい例だと思わない？ 私がキサさんに出会ったのは確かに前世のことがあったからだろうけど、仲良くなれたのは、甲斐馨と木佐小次郎がふたりでいろいろバカをやって

きたからだよ。一緒に学校行ったり一緒に仕事したりして。それは緑麗と真武君の関係とはぜんぜん関係ないよね。

あ、バカをやってきたのは馨だけ、とかキサさんは言いそうだけど」

「……」

碧霞元君は途中からは上の空で、携帯ゲームに集中していたが、とりあえず、辞表は提出しようと思う。今日にでも。

火雲宮西側の城壁沿いを、大型のバイクが北上している。運転しているのは陽輝で、その後ろに沙龍がタンデムしていた。

バイクを走らせながらの会話なので自然と声が大きくなる。

「あのと きなー、俺はお前が地上に帰るって言い出したらどーしようかと思って たんだよなー」

陽輝は五年前の話をしているのだ。

「えー、それはないでしょーって、見てて分かんなかった？」

「まあ、女心は男にやよく分かんねえからな」

右側にはずっと高い壁が続いているが、もう少し行ったところに小さな通用門があるはずだ。

隠し扉のようになっていて、普段は中から頑丈な鍵がかけられているのだが、五年前、ここは開いていた。

沙龍はここに来るのは二回目だが、一回目と同じ人に送ってもらったことになる。

「ありがとね。病み上がりのところ」

停車と同時に後部座席からヒョイと降りて言った。

怪我はもうほとんど治っているのは知っている。

「あ、そうだ。写真、見るか？」

「ああ、双子ちゃん？」

陽輝は携帯端末を取り出して、昨日撮ったばかりの家族写真を見せてくれた。

赤ん坊たちはまだ生後二週間ほどなので、男女の見分けすらできないが、この時点では同じ顔をしていた。

「かわいい。あとで私の端末に送っておいて」

沙龍の服の中に居た小龍がヒョイと顔を出し、同じように写真を覗き込むも、よく分からない、という顔をしている。

陽輝が端末を受け取ろうとしたとき、小龍が、

ガブツ

と、その指に噛みついたので、陽輝も応戦する。

「ああ？　なんだこら。やろうってのか」

「ムキュー！」

「いい加減にしないと、かば焼きにすんぞ！」

いつものことである。

惑星の代表相手に本気で喧嘩する不良中年など放っておいて、沙龍はさっさと行ってしまった。

壁と同色の小さな扉を開けると、一瞬で景色が変わる。一面の黄色い花の絨毯が沙龍を迎えてくれた。

本来なら、厳重なセキュリティが施されている場所なのだが、九雷が「昼休みの一時間だけ切っておく」と言ってくれたのである。

一面の黄色い花が見たい、と言ったときの九雷の返答がそれだったのだ。

沙龍は少しめかしこんだ姿で、黄色い花畑の中を歩いていた。

見上げた空は夢で見たのと同じ青い色をしている。

しばらく歩くと、

(元帥、見つけ)

恋人は黒焰虎を枕に、花畑の上で昼寝をしている。

気付いているだろうが、そろりそろりと近づいて、隣に腰をおろした。フワツと金盞花の匂いがひろがる。

「……太上老君がな」

寝ていた九雷が言った。

「ん？」

「以前、泰山府君のところの親子喧嘩をどうしたらいいかを聞いたとき、『この天地の命運は、天地が決めればよい』と言っていた」

「うん」

「ついさつき、それは小龍のことだと気付いた」

「この天地の運命は小龍が決めればいい、ってこと？」

「ああ」

九雷は、枕を沙龍の膝の上に変えて、もう一度目をつぶった。

「そういうえば、小龍は、この星の権利は元帥に返してもらったって、龍王山で

言ってたよ」

「そうか……」

「ハイ、お弁当。私が作ったわけじゃないけど」

と、持ってきたカゴから重箱を出したが、九雷はまだ起きる気はないようだった。

沙龍の携帯端末に、いくつかメールが入っていたので見てみる。

陽輝と偃月からだ。

陽輝のほうはさつき沙龍が言った通り、写真だけ送って来た。

偃月は、出産報告である。陽輝のところとは二週間遅れでこちらにも今日産まれたらしい。

「ユエンところは女の子だ！」

「そうか。落ち着いたら会いに行くか」

「うん」

どこかで小龍が鳴いていた。いや、置いて行かれたことに泣いているのだ。悲しそうに。

「こつちだよ！」

沙龍が呼ぶと、

「キューウ！」

緑色の小さな龍が急いでやって来た。

【完】

大長編の『東方三界黄龍伝』、やっと完結しました。ここまでになん十年かかりました。今回ばかりは、終わってホッとするよりも、ちよつと泣きそうになりながら書いていました。特に、碧霞元君と沙龍の最後の会話部分。作者の心情とは裏腹に、フアニーなシーンになっていきますが、要するに、そういうことです。

輪廻ってあればいいなあ、という思いで書き始めた小説なので、輪廻を否定する影の主人公、碧霞元君をどうやって軟化させるか、が最大のポイントだったんですが、彼女を救わないと意味がないので、色んな人に頑張ってもらいました。中でも、偃月が予想外に活躍してくれた気がします。

敵とはいえないような立ち位置のラスボスなので、読み手にはなんとか碧霞元君のことも理解してもらおう、と思い、今回は三部構成になったわけです。

ずっと読んできてくださったかたは、本当にありがとうございます。ぜひ感想をお聞かせください。

一応、全編通じての伏線などは全部回収したつもりですが、天真先生の恋の行方とか、赤帝君のその後とかは『梨蘭編』で書くつもりですので、またお会いできると思っています。

このシリーズは、いままでに、色んな方に色んなキャラの絵を描いていただきました。

厚かましくも自分からお願いしたり、サプライズで描いていただいたり、企画でも描いていただきました。

その絵たちは全て宝物です。本当に大感謝です。

最後に、第二部の表紙に使わせてもらった、素敵な碧霞元君（めっちゃ美人さん！）の絵を描いてくれた卯浪糸さんにも大・感・謝です！

二〇二〇年五月十二日小龍

